

北 斗 市

村 前 ノ 沢 遺 跡

高規格道路函館江差自動車道茂辺地木古内道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

2017

北 斗 市 教 育 委 員 会



村前ノ沢遺跡から東方向・茂辺地方面と函館湾を望む（平成 25 年度撮影）



村前ノ沢遺跡から南方向・当別川河口方面を望む（平成 26 年度撮影）



村前ノ沢遺跡出土の縄文土器（縄文時代中期～後期）



村前ノ沢遺跡出土の縄文土器（縄文時代中期前葉）



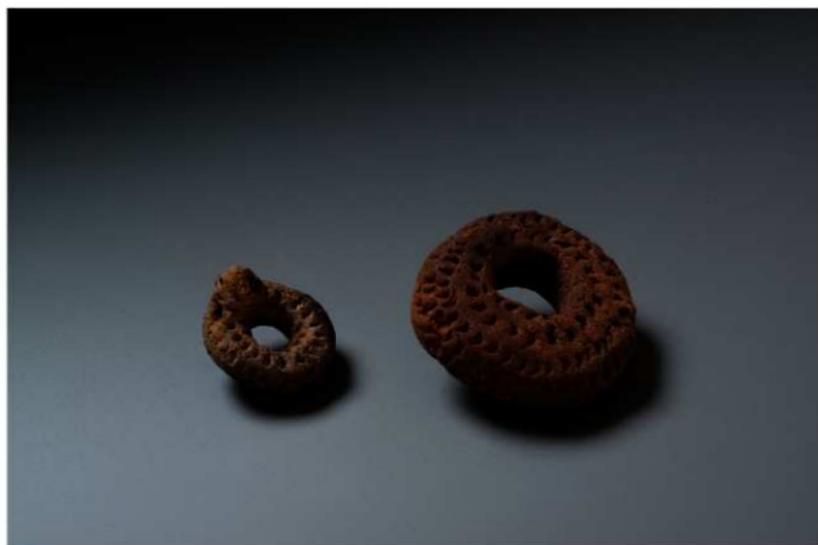
村前ノ沢遺跡出土の縄文土器（縄文時代中期中葉～後葉）



村前ノ沢遺跡出土の縄文土器（縄文時代後期）



村前ノ沢遺跡出土の土製品



村前ノ沢遺跡出土の環状土製品（縄文時代中期前葉）

北 斗 市

村 前 ノ 沢 遺 跡

高規格道路函館江差自動車道茂辺地木古内道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

2017

北 斗 市 教 育 委 員 会

例 言

1. 本書は、国土交通省北海道開発局函館開発建設部が実施する高規格道路函館江差自動車道茂辺地木古内道路工事に伴う平成25年度および平成26年度用地内埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 対象遺跡は、北斗市当別533-21ほかにか所在する村前ノ沢遺跡（B-06-105）である。
3. 本調査は北斗市教育委員会が実施した。また、株式会社シン技術コンサルがその補助を行った。
4. 本書は株式会社シン技術コンサル・時田太郎が編集し、北斗市教育委員会・森靖裕が監修した。
5. 各章の執筆文責については以下の通りである。I章は時田が執筆した。II章は時田が総論を執筆し、事実記載については、堅穴住居跡については各遺構の現場担当者が、土坑その他については時田が、出土遺物のうち土器・土製品については時田、剥片石器については三上英則、礮石器・石製品については山田あや子がそれぞれ担当・執筆した。IV章については、各節文末に文責者を記した。論考・総括等に係る図版は、各節執筆文責者が作成した。全体の監修は時田が行った。
6. 実測図は、株式会社シン技術コンサルが作成した。遺構等測量図については宮崎雅春が、遺物については、土器・土製品については時田・荻野幸男、剥片石器については三上、礮石器・石製品については山田がそれぞれ担当し監修した。全体の統括は、時田が行った。
7. 発掘調査での写真撮影は、調査担当者・調査員・調査補助員が分担して行った。
8. 現場空中写真撮影は、株式会社シン技術コンサルが行った。
9. 遺物の写真撮影は、復元土器個体等に関しては(有)写真事務所クリーク 佐藤彦彦氏に依頼して行った。土器破片資料および石器類等に関しては株式会社シン技術コンサルが行った。
10. 出土資料の自然科学的手法による分析はバリノ・サーヴェイ株式会社に依頼し、玉稿を賜った。
11. 出土資料の種子鑑定は椿坂恭代氏に依頼し、玉稿を賜った。
12. 出土資料の石質鑑定はアースサイエンス株式会社に依頼し、玉稿を賜った。
13. 遺物および作成した記録類は、北斗市教育委員会が保管する。
14. 調査にあたっては下記の機関および諸氏にご協力、ご指導頂いた。記して感謝申し上げる。
国土交通省北海道開発局函館開発建設部 北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物館課：田村雅彦、村本周三（財）北海道埋蔵文化財センター：熊谷仁志、工藤研治、田口 尚、大森司統、坂本尚史、芝田直人、立田 理、福井淳一、柳瀬由佳 函館市教育委員会：阿部千春、佐藤智雄、福田裕二、吉田 力 市立函館博物館：小林 貢 厚沢部町教育委員会：石井淳平 洞爺湖町教育委員会：角田隆志 七飯町教育委員会：山田 央 むかわ町教育委員会：田代雄介 森町教育委員会：高橋 毅、加藤 渉、本山志郎 余市町教育委員会：乾 芳宏 特定非営利活動法人函館市埋蔵文化財事業団：坪井睦美、佐藤 稔 北海道教育大学函館校：紀藤典夫 北海道考古学研究所：横山英介
(順不同・敬称略 所属は当時)

凡 例

1. 本文および図表での遺構表記は、以下の略号を用いた。
堅穴住居跡：PD (Pit Dwelling)、土坑：P (Pit)、落し穴：TP (Trap Pit)、
屋外炉：FP (Fire Place)、焼土：FS (Fire Soil)
2. 本書中の挿図の縮尺は主に以下のとおり。なお、縮率・スケール等については、各図版に明記した。
遺構 堅穴住居跡・土坑・落し穴 1：60 屋内炉・遺物出土状況 1：40 屋外炉 1：20
遺物 復元土器、土器拓影・断面図、石斧・石のみ以外の礮石器 1：3、
剥片石器・石斧・石ノミ 1：2
3. 土層の表記は、基本土層はローマ数字で、遺構の覆土はアラビア数字で示した。
4. 土層の色調は『新版標準土色帖』（2004年版財団法人日本色彩研究所色票監修）を使用した。
土層注記については、以下の略号を用いた。
ローム：L、ブロック：B、ブロックの大きさ S：1cm以下、M：1～2cm、L：2cm以上
5. 挿図・表中では、以下の略号を用いた。
P：土器、F：剥片・剥片石器、S：礮・礮石器
6. 挿図中の方位は世界測地系平面直角座標の真北、レベルは標高値を示す。
7. 写真図版の縮小率は任意である。

本文目次

例言

凡例

本文目次

挿図目次・表目次・写真図版目次

I 調査概要

1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査に至る経緯	3
4 遺跡の位置とその周辺	3
(1) 歴史的環境	3
(2) 地形環境と周辺の遺跡	5
5 調査方法の概要	7
(1) 調査区の設定と基本層序	7
(2) 調査及び整理方法	7
(3) 遺物の分類	7

II 発掘調査における成果

1 調査の概要	13
2 遺構と遺物	15
(1) 竪穴住居跡 (PD)	15
(2) 土坑 (P)	39
(3) 落し穴 (TP)	39
(4) 屋外炉 (FP)	39
(5) その他の遺構	47
(6) 遺構出土の遺物	50
3 遺構外出土の遺物	61
(1) 土器	61
(2) 剥片石器	108
(3) 礫石器	114
(4) 土製品	138
(5) 石製品	142

III 自然科学的手法による分析

1 放射性炭素年代測定・火山灰分析・出土骨資料同定	
北斗市村前ノ沢遺跡出土試料の分析	144
2 植物遺体同定	
村前ノ沢遺跡から検出された植物遺体について	155
3 石材鑑定	
村前ノ沢遺跡の石材鑑定	158

IV 総括	162
-------	-----

写真図版

報告書抄録・奥付

挿 図 目 次

第 I - 1 図	遺跡の位置……………	4	第 II - 34 図	遺構出土土造物(1) ……	51
第 I - 2 図	調査区とその周辺……………	4	第 II - 35 図	遺構出土土造物(2) ……	52
第 I - 3 図	村前/沢遺跡の位置と周辺の遺跡…	6	第 II - 36 図	遺構出土土造物(3) ……	54
第 I - 4 図	土層堆積図(1) (平成25年度調査区内)…	9	第 II - 37 図	遺構出土土造物(4) ……	55
第 I - 5 図	土層堆積図(2) (平成26年度調査区内)…	10	第 II - 38 図	遺構出土土造物(5) ……	57
第 I - 6 図	土層堆積図(3) (平成26年度調査区内)…	11	第 II - 39 図	遺構出土土造物(6) ……	59
第 I - 7 図	土層堆積図(4) (平成26年度調査区内)…	12	第 II - 40 図	遺構出土土造物(7) ……	60
第 II - 1 図	村前/沢遺跡遺構配置図(平成25・26年度)…	14	第 II - 41 図	遺構外出土の土器(1) ……	62
第 II - 2 図	P D - 1 平面図・土層断面図…	16	第 II - 42 図	遺構外出土の土器(2) ……	64
第 II - 3 図	P D - 1 出土土造物(1) ……	16	第 II - 43 図	遺構外出土の土器(3) ……	65
第 II - 4 図	P D - 1 出土土造物(2) ……	17	第 II - 44 図	遺構外出土の土器(4) ……	66
第 II - 5 図	P D - 1 出土土造物(3) ……	18	第 II - 45 図	遺構外出土の土器(5) ……	67
第 II - 6 図	P D - 2 平面図・土層断面図…	20	第 II - 46 図	遺構外出土の土器(6) ……	68
第 II - 7 図	P D - 2 出土土造物(1) ……	20	第 II - 47 図	遺構外出土の土器(7) ……	69
第 II - 8 図	P D - 2 出土土造物(2) ……	21	第 II - 48 図	遺構外出土の土器(8) ……	70
第 II - 9 図	P D - 3・10平面図・土層断面図…	23	第 II - 49 図	遺構外出土の土器(9) ……	71
第 II - 10 図	P D - 3・10出土土造物(1) ……	24	第 II - 50 図	遺構外出土の土器(10)……	72
第 II - 11 図	P D - 3・10出土土造物(2) ……	25	第 II - 51 図	遺構外出土の土器(11)……	73
第 II - 12 図	P D - 4 平面図・土層断面図…	26	第 II - 52 図	遺構外出土の土器(12)……	74
第 II - 13 図	P D - 4 出土土造物……………	27	第 II - 53 図	遺構外出土の土器(13)……	75
第 II - 14 図	P D - 5・6 平面図・土層断面図…	30	第 II - 54 図	遺構外出土の土器(14)……	76
第 II - 15 図	P D - 5 出土土造物……………	31	第 II - 55 図	遺構外出土の土器(15)……	77
第 II - 16 図	P D - 6 出土土造物……………	32	第 II - 56 図	遺構外出土の土器(16)……	78
第 II - 17 図	P D - 7 平面図・土層断面図…	33	第 II - 57 図	遺構外出土の土器(17)……	79
第 II - 18 図	P D - 7 出土土造物……………	33	第 II - 58 図	遺構外出土の土器(18)……	80
第 II - 19 図	P D - 8 平面図・土層断面図…	35	第 II - 59 図	遺構外出土の土器(19)……	85
第 II - 20 図	P D - 8 出土土造物(1) ……	36	第 II - 60 図	遺構外出土の土器(20)……	86
第 II - 21 図	P D - 8 出土土造物(2) ……	37	第 II - 61 図	遺構外出土の土器(21)……	87
第 II - 22 図	P D - 9 平面図・土層断面図…	38	第 II - 62 図	遺構外出土の土器(22)……	88
第 II - 23 図	P D - 9 出土土造物……………	38	第 II - 63 図	遺構外出土の土器(23)……	89
第 II - 24 図	P - 1 ~ 7 平面図・土層断面図…	40	第 II - 64 図	遺構外出土の土器(24)……	90
第 II - 25 図	P - 8 ~ 11 平面図・土層断面図…	41	第 II - 65 図	遺構外出土の土器(25)……	91
第 II - 26 図	P - 12 ~ 18 平面図・土層断面図…	42	第 II - 66 図	遺構外出土の土器(26)……	92
第 II - 27 図	P - 19 ~ 24 平面図・土層断面図…	43	第 II - 67 図	遺構外出土の土器(27)……	93
第 II - 28 図	P - 25 ~ 28 平面図・土層断面図…	44	第 II - 68 図	遺構外出土の土器(28)……	94
第 II - 29 図	P - 29 ~ 35 平面図・土層断面図…	45	第 II - 69 図	遺構外出土の土器(29)……	95
第 II - 30 図	P - 36 ~ 41 平面図・土層断面図…	46	第 II - 70 図	遺構外出土の土器(30)……	96
第 II - 31 図	P - 42 ~ 45 平面図・土層断面図…	47	第 II - 71 図	遺構外出土の土器(31)……	97
第 II - 32 図	T P - 1・2, F P - 1 平面図・土層断面図…	48	第 II - 72 図	遺構外出土の土器(32)……	98
第 II - 33 図	F P - 2 ~ 4 平面図・土層断面図…	49	第 II - 73 図	遺構外出土の土器(33)……	99

第Ⅱ-74図	遺構外出土の土器(34) ……100	第Ⅱ-101図	遺構外出土の礫石器(7) ……128
第Ⅱ-75図	遺構外出土の土器(35) ……101	第Ⅱ-102図	遺構外出土の礫石器(8) ……129
第Ⅱ-76図	遺構外出土の土器(36) ……102	第Ⅱ-103図	遺構外出土の礫石器(9) ……130
第Ⅱ-77図	遺構外出土の土器(37) ……103	第Ⅱ-104図	遺構外出土の礫石器(10) ……132
第Ⅱ-78図	遺構外出土の土器(38) ……104	第Ⅱ-105図	遺構外出土の礫石器(11) ……133
第Ⅱ-79図	遺構外出土の土器(39) ……105	第Ⅱ-106図	遺構外出土の礫石器(12) ……134
第Ⅱ-80図	遺構外出土の土器(40) ……106	第Ⅱ-107図	遺構外出土の礫石器(13) ……135
第Ⅱ-81図	遺構外出土の土器(41) ……107	第Ⅱ-108図	遺構外出土の礫石器(14) ……136
第Ⅱ-82図	遺構外出土の土器(42) ……108	第Ⅱ-109図	遺構外出土の礫石器(15) ……137
第Ⅱ-83図	遺構外出土の剥片石器(1) ……109	第Ⅱ-110図	遺構外出土の土製品(1) ……139
第Ⅱ-84図	遺構外出土の剥片石器(2) ……110	第Ⅱ-111図	遺構外出土の土製品(2) ……140
第Ⅱ-85図	遺構外出土の剥片石器(3) ……111	第Ⅱ-112図	遺構外出土の土製品(3) ……141
第Ⅱ-86図	遺構外出土の剥片石器(4) ……112	第Ⅱ-113図	遺構外出土の石製品(1) ……142
第Ⅱ-87図	遺構外出土の剥片石器(5) ……113	第Ⅱ-114図	遺構外出土の石製品(2) ……143
第Ⅱ-88図	遺構外出土の剥片石器(6) ……115	第Ⅳ-1 図	村前ノ沢遺跡 各時期土器群の分布状況(1) ……163
第Ⅱ-89図	遺構外出土の剥片石器(7) ……116	第Ⅳ-2 図	村前ノ沢遺跡 各時期土器群の分布状況(2) ……164
第Ⅱ-90図	遺構外出土の剥片石器(8) ……117	第Ⅳ-3 図	村前ノ沢遺跡・茂辺地4遺跡出土の円筒上層式土器 ……166
第Ⅱ-91図	遺構外出土の剥片石器(9) ……118	第Ⅳ-4 図	村前ノ沢遺跡・茂辺地4遺跡出土の円筒上層式土器 における各段階遷要素の相関 ……168
第Ⅱ-92図	遺構外出土の剥片石器(10) ……119	第Ⅳ-5 図	円筒上層b式・e式における結束第一種原体による 縄文(地文)施文過程の復元 ……170
第Ⅱ-93図	遺構外出土の剥片石器(11) ……120	第Ⅳ-6 図	村前ノ沢遺跡・茂辺地4遺跡出土の瓦葺初層土器群編年 ……172
第Ⅱ-94図	遺構外出土の剥片石器(12) ……121	第Ⅳ-7 図	縄文時代中期前葉・露状土製品の分布 ……175
第Ⅱ-95図	遺構外出土の礫石器(1) ……122	第Ⅳ-8 図	村前ノ沢遺跡 礫石器器種比率 ……177
第Ⅱ-96図	遺構外出土の礫石器(2) ……123	第Ⅳ-9 図	村前ノ沢遺跡 擦石分布図 ……178
第Ⅱ-97図	遺構外出土の礫石器(3) ……124	第Ⅳ-10図	村前ノ沢遺跡 石皿類分布図 ……179
第Ⅱ-98図	遺構外出土の礫石器(4) ……125	第Ⅳ-11図	石冠状土製品の類例一覧 ……181
第Ⅱ-99図	遺構外出土の礫石器(5) ……126		
第Ⅱ-100図	遺構外出土の礫石器(6) ……127		

表 目 次

表 1	検出遺構集計 ……13
表 2	出土遺物集計 ……15
表 3	平成25年度遺構一覧 ……182
表 4	平成26年度遺構一覧 ……183
表 5	掲載遺物一覧 ……184

写真図版目次

写真図版 1	平成25・26年度調査区風景	206
写真図版 2	調査状況(1):竪穴住居跡	207
写真図版 3	調査状況(2):土坑(1)	208
写真図版 4	調査状況(3):土坑(2)	209
写真図版 5	調査状況(4):落し穴・その他遺構	210
写真図版 6	調査状況(5):出土遺物・体験発掘	211
写真図版 7	掲載遺物写真(1):竪穴住居跡出土遺物(PD-1)	212
写真図版 8	掲載遺物写真(2):竪穴住居跡出土遺物(PD-2)	213
写真図版 9	掲載遺物写真(3):竪穴住居跡出土遺物(PD-3・10)	214
写真図版10	掲載遺物写真(4):竪穴住居跡出土遺物(PD-4・5)	215
写真図版11	掲載遺物写真(5):竪穴住居跡出土遺物(PD-6・7・8)	216
写真図版12	掲載遺物写真(6):竪穴住居跡(PD-8・9)・土坑出土遺物(1)	217
写真図版13	掲載遺物写真(7):土坑出土遺物(2)	218
写真図版14	掲載遺物写真(8):土坑出土遺物(3)	219
写真図版15	掲載遺物写真(9):土坑(4)・その他遺構出土遺物	220
写真図版16	掲載遺物写真(10):焼土出土遺物	221
写真図版17	掲載遺物写真(11):遺構外出土の土器(1)	222
写真図版18	掲載遺物写真(12):遺構外出土の土器(2)	223
写真図版19	掲載遺物写真(13):遺構外出土の土器(3)	224
写真図版20	掲載遺物写真(14):遺構外出土の土器(4)	225
写真図版21	掲載遺物写真(15):遺構外出土の土器(5)	226
写真図版22	掲載遺物写真(16):遺構外出土の土器(6)	227
写真図版23	掲載遺物写真(17):遺構外出土の土器(7)	228
写真図版24	掲載遺物写真(18):遺構外出土の土器(8)	229
写真図版25	掲載遺物写真(19):遺構外出土の土器(9)	230
写真図版26	掲載遺物写真(20):遺構外出土の土器(10)	231
写真図版27	掲載遺物写真(21):遺構外出土の土器(11)	232
写真図版28	掲載遺物写真(22):遺構外出土の土器(12)	233
写真図版29	掲載遺物写真(23):遺構外出土の土器(13)	234
写真図版30	掲載遺物写真(24):遺構外出土の土器(14)	235
写真図版31	掲載遺物写真(25):遺構外出土の土器(15)	236
写真図版32	掲載遺物写真(26):遺構外出土の土器(16)	237
写真図版33	掲載遺物写真(27):遺構外出土の土器(17)	238
写真図版34	掲載遺物写真(28):遺構外出土の土器(18)	239
写真図版35	掲載遺物写真(29):遺構外出土の土器(19)	240
写真図版36	掲載遺物写真(30):遺構外出土の土器(20)	241
写真図版37	掲載遺物写真(31):遺構外出土の土器(21)	242
写真図版38	掲載遺物写真(32):遺構外出土の土器(22)	243
写真図版39	掲載遺物写真(33):遺構外出土の土器(23)	244
写真図版40	掲載遺物写真(34):遺構外出土の土器(24)	245

写真図版41	掲載遺物写真(35): 遺構外出土の土器(25)	246
写真図版42	掲載遺物写真(36): 遺構外出土の土器(26)	247
写真図版43	掲載遺物写真(37): 遺構外出土の土器(27)	248
写真図版44	掲載遺物写真(38): 遺構外出土の土器(28)	249
写真図版45	掲載遺物写真(39): 遺構外出土の土器(29)	250
写真図版46	掲載遺物写真(40): 遺構外出土の土器(30)	251
写真図版47	掲載遺物写真(41): 遺構外出土の土器(31)	252
写真図版48	掲載遺物写真(42): 遺構外出土の土器(32)	253
写真図版49	掲載遺物写真(43): 遺構外出土の土器(33)	254
写真図版50	掲載遺物写真(44): 遺構外出土の土器(34)	255
写真図版51	掲載遺物写真(45): 遺構外出土の土器(35)	256
写真図版52	掲載遺物写真(46): 遺構外出土の土器(36)	257
写真図版53	掲載遺物写真(47): 遺構外出土の土器(37)	258
写真図版54	掲載遺物写真(48): 遺構外出土の剥片石器(1)	259
写真図版55	掲載遺物写真(49): 遺構外出土の剥片石器(2)	260
写真図版56	掲載遺物写真(50): 遺構外出土の剥片石器(3)	261
写真図版57	掲載遺物写真(51): 遺構外出土の剥片石器(4)	262
写真図版58	掲載遺物写真(52): 遺構外出土の剥片石器(5)	263
写真図版59	掲載遺物写真(53): 遺構外出土の礫石器(1)	264
写真図版60	掲載遺物写真(54): 遺構外出土の礫石器(2)	265
写真図版61	掲載遺物写真(55): 遺構外出土の礫石器(3)	266
写真図版62	掲載遺物写真(56): 遺構外出土の礫石器(4)	267
写真図版63	掲載遺物写真(57): 遺構外出土の礫石器(5)	268
写真図版64	掲載遺物写真(58): 遺構外出土の礫石器(6)	269
写真図版65	掲載遺物写真(59): 遺構外出土の礫石器(7)	270
写真図版66	掲載遺物写真(60): 遺構外出土の礫石器(8)	271
写真図版67	掲載遺物写真(61): 遺構外出土の礫石器(9)・土製品(1)	272
写真図版68	掲載遺物写真(62): 遺構外出土の土製品(2)	273
写真図版69	掲載遺物写真(63): 遺構外出土の土製品(3)	274
写真図版70	掲載遺物写真(64): 遺構外出土の石製品	275

I 調査概要

1 調査要項

事業名：高規格道路函館江差自動車道茂辺地木古内道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査事業

委託者：北海道開発局函館開発建設部

受託者：北斗市

調査機関：北斗市教育委員会（補助：株式会社シン技術コンサル）

遺跡名：村前ノ沢遺跡（北海道教育委員会登録番号 B-06-105）

所在地：北斗市当別 533-2、-21

発掘調査

（平成 25 年度）

調査面積：1,443 m²

事業期間：平成 25 年 6 月 26 日～平成 26 年 3 月 28 日

調査期間：平成 25 年 7 月 25 日～平成 25 年 11 月 7 日

整理期間：平成 25 年 11 月 11 日～平成 26 年 3 月 10 日
（平成 26 年度）

調査面積：2,804 m²

事業期間：平成 26 年 5 月 7 日～平成 27 年 3 月 25 日

調査期間：平成 26 年 5 月 28 日～平成 26 年 11 月 26 日

整理期間：平成 26 年 11 月 27 日～平成 27 年 3 月 10 日

整理作業

（平成 27 年度）

事業期間：平成 27 年 7 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日

整理期間：平成 27 年 8 月 10 日～平成 28 年 3 月 10 日

（平成 28 年度）

事業期間：平成 28 年 5 月 1 日～平成 29 年 3 月 31 日

整理期間：平成 28 年 5 月 16 日～平成 29 年 3 月 10 日

2 調査体制

（平成 25 年度）

教 育 長	永田 裕（調査主体者）
社会教育課長	岡村 弘之
社会教育係長	京谷 亨
社会教育係主査	森 靖裕（調査担当者）
社会教育係主任	日景 尚幸 佐藤 恭
社会教育係主事	佐藤 優哉
主任調査員	時田太一郎（調査担当者、株式会社シン技術コンサル）
調 査 員	三上 英則（株式会社シン技術コンサル）
調 査 補 助 員	宮崎 雅春（株式会社シン技術コンサル） 山田あや子（株式会社シン技術コンサル）

(平成 26 年度)

教 育 長	永田 裕 (調査主体者)
社会教育課長	山田 敬治
社会教育係長	京谷 亨
社会教育係主査	森 靖裕 (調査担当者)
社会教育係主任	日景 尚幸
	大野佳奈子
社会教育係主事	佐藤 優哉
主任 調査員	時田太一郎 (調査担当者、株式会社シン技術コンサル)
調 査 員	三上 英則 (株式会社シン技術コンサル)
調 査 補 助 員	宮崎 雅春 (株式会社シン技術コンサル)
	山田あや子 (株式会社シン技術コンサル)

(平成 27 年度)

教 育 長	永田 裕 (調査主体者)
社会教育課長	山田 敬治
社会教育係長	大井川かおり
社会教育係主査	森 靖裕 (調査担当者)
社会教育係主任	日景 尚幸
社会教育係主事	佐藤 優哉
	本間 美雲
主任 調査員	時田太一郎 (調査担当者、株式会社シン技術コンサル)
調 査 員	三上 英則 (株式会社シン技術コンサル)
調 査 補 助 員	宮崎 雅春 (株式会社シン技術コンサル)
	山田あや子 (株式会社シン技術コンサル)
特殊作業員	荻野 幸男 (株式会社シン技術コンサル)

(平成 28 年度)

教 育 長	永田 裕 (調査主体者)
社会教育課長	山田 敬治
社会教育係長	高田 剛
社会教育係主査	森 靖裕 (調査担当者)
社会教育係主任	日景 尚幸
社会教育係主事	渡邊 明廉
	本間 美雲
主任 調査員	時田太一郎 (調査担当者、株式会社シン技術コンサル)
調 査 員	三上 英則 (株式会社シン技術コンサル)
調 査 補 助 員	宮崎 雅春 (株式会社シン技術コンサル)
	山田あや子 (株式会社シン技術コンサル)
特殊作業員	荻野 幸男 (株式会社シン技術コンサル)

3 調査に至る経緯

村前ノ沢遺跡（以下「本遺跡」）は、高規格道路函館江差自動車道の建設計画に伴い北斗市教育委員会が実施した、工事用地内の埋蔵文化財包蔵地所在確認調査により発見された。

函館江差自動車道は平成15年3月24日に函館IC—上磯IC（現・北斗中央IC）間の開通をもって供用が開始された。同自動車道函館IC—茂辺地IC間は「函館茂辺地道路」と呼称されるが、これに続く茂辺地IC—木古内IC間を繋ぐ「茂辺地木古内道路」の建設計画区間において、既知の遺跡である茂辺地4遺跡および当別川左岸遺跡の間隙の区間について、北海道開発局函館開発建設部と北海道教育委員会との協議に基づき北斗市教育委員会が平成24年11月14日に実施した埋蔵文化財の所在および範囲確認調査により遺構・遺物の分布が認められ、同年12月に新たな埋蔵文化財包蔵地（B-06-105）として登録・記載された。記載時の所在地番は北斗市当別533-2、-21である。この際確認された遺跡の範囲は、工事区間のうち4,247㎡である。

平成25年7月25日から11月7日まで、北斗市教育委員会による第一次調査が実施された（調査補助：株式会社シン技術コンサル）。これは、北海道開発局函館開発建設部の委託により、北斗市が受託したものである。要調査範囲のうち北西・山側、1,443㎡について発掘し、竪穴住居跡1軒、土坑17基、落し穴2基、焼土47か所を検出、縄文時代中期中葉～後半を中心とした土器・石器など総計約35,000点の遺物が出土した。

翌平成26年度には要調査範囲のうち残る南東・海側、2,804㎡を対象とした発掘調査が実施された。事業委託者および受託者、調査実施機関は前年度と同一である。平成26年5月28日に発掘を開始し、同年11月26日に終了し、竪穴住居跡9軒、土坑28基、屋外炉3基、焼土43か所を検出、縄文時代中期前半～後期初頭の土器・石器などの遺物総計約135,000点の遺物が出土した。

整理作業は発掘調査実施年度（平成25年度・平成26年度）の冬期間および平成27年度・平成28年度に行われた。発掘調査時と同じく、北海道開発局函館開発建設部の委託により北斗市が受託し、北斗市教育委員会が実施した（作業補助：株式会社シン技術コンサル）。

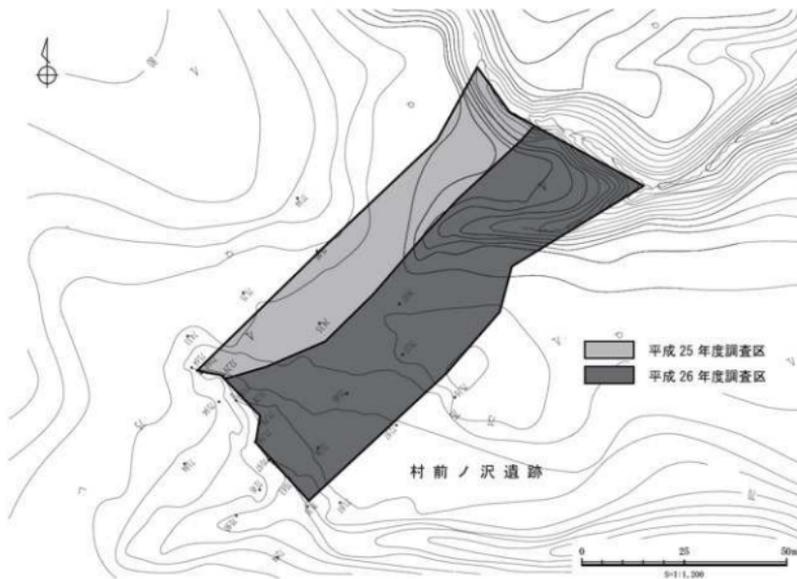
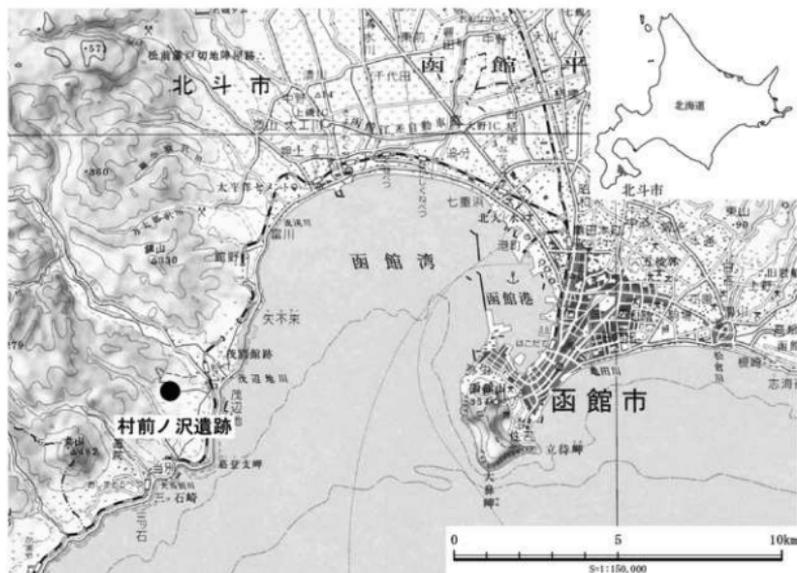
平成25～27年度に遺物水洗等の一次整理作業、平成27年度～平成28年度に二次整理作業を実施し、以上の成果を元にとりまとめたのが本報告書となる。

4 遺跡の位置とその周辺

（1）歴史的環境

本遺跡は北斗市の南西、当別地区に所在する。地名の由来は道内各地に存在する「とうべつ」と同じく、その語源はアイヌ語「トー・ベツ（沼・川）」であると考えられる。「当別」の当て字は江戸期ごろには定着していたようであり、松前藩により江戸幕府へ提出された『松前島郷帳』のうち元禄郷帳（元禄13年・1700年）並びに天保郷帳（天保5年・1835年）に「当別村」の記載があるほか、天明5（1785）年に幕命を受けた青島俊蔵政教らにより記された蝦夷地調査記録である『蝦夷拾遺』には当別村の規模として「十戸不足 三十余人」とある。その後明治期に入り郡区町村編制法により明治14（1881）年に三ツ石村と合併し石別村の一部、北海道二級町村制の改正に伴い明治39（1906）年に茂辺地村と合併し茂別村の一部となり、さらに昭和30（1955）年の上磯町との合併・平成18（2006）年に大野町との合併を経て、現在の北斗市当別となる。

調査区周辺は発掘調査当時一面の山林であり、近隣に住居は無くやや離れた区域に畑地が広がるのみであったが、以前はごく小規模ではあるが村落が存在していたようであり、遺跡名に冠される地域名「村前ノ沢」はそれらと区内を流れる沢にちなむものと考えられる。当地の空中写真として



現在参照可能なものとして最古である日本陸軍による1944（昭和19）年撮影のもの、および米軍により1948（昭和23）年に撮影されたものがあるが、それらを確認すると本遺跡の所在する区域に広がる畑地と、それに伴う数軒の建物が確認できる。調査区南側は人為的な改変により現地形を大きく喪失しているが、その範囲は古写真で確認できる畑地の区画とほぼ一致することから、これらの造成に伴い削平されたものと考えられる。村落の開始時期については不明であるが、存続期間については、現地周辺での聞き取りにより、昭和30年代まで居住者がいたとの証言が得られている。調査区内削平部からは村落・畑地運営に伴うものと考えられる什器類等の日用品を主体とした現代遺物が多数出土しており、その中にもいくつか年代を推定する手がかりとなるものがある。例えば出土遺物のひとつに牛乳瓶があるが、昭和初期から乳等省令等により企画が定められていく昭和30年前後まで流通していた細口の一合瓶であった。また、オブラート缶の蓋に「東京都港区麻生新堀町」の記載があり、これは東京都に港区が置かれた1947（昭和22）年から「住居表示に関する法律」（1962（昭和37）年施行）による1966（昭和41）年の同区再編までの限られた期間にのみ存在する町名である。これらは、先の聞き取り情報における年代観と概ね一致する。なお、江戸期以前の歴史時代の遺構・遺物については調査範囲内では確認できなかった。

（2）地形環境と周辺の遺跡

西に当地の名を冠する当別川、東を茂辺地川による開析谷に挟まれた海岸段丘上に広がる標高50～70m・幅2kmほどの平坦面のうち、後背山地麓そば、JR茂辺地駅から水平距離約1.4km西・海岸から約1.9kmほど内陸側、標高70～75mの段丘基部に本遺跡は立地する。遺跡の範囲は、二又に分岐した当別川開析谷へと下る沢に北東・南西を挟まれた舌状台地の基部にあたる。調査区内にはさらに、北東側沢から分岐した支沢が東西方向に走る。同じ段丘の上では、本遺跡の他にも複数の遺跡が知られており、その分布は大まかに段丘基部周辺（内陸側）と海岸側の二つの区域に分けられる。段丘基部周辺の遺跡分布は、主に両側の開析谷へと下る沢の始端部を中心に広がっている。時期としては縄文時代中期～後期が主体であり、本遺跡の北東側の沢を挟んだ対岸には中期中葉・後期初頭の集落跡が検出された茂辺地4遺跡（調査：（財）北海道埋蔵文化財センター・特定非営利活動法人函館市埋蔵文化財事業団・北斗市教育委員会、平成22～26年実施）や、縄文時代中期・後期の広範な遺物分布が確認された茂辺地1遺跡・茂辺地2遺跡など（いずれも未調査）が所在している。一方、本遺跡の南西側の沢を挟んだ対岸には、中期前葉・後期初頭の遺構群が検出された当別川左岸遺跡（調査：（財）北海道埋蔵文化財センター、平成23年・24年実施）が立地している。この区域全体を俯瞰すると、所在を変えながらも縄文時代中期前葉から後期初頭にかけて絶え間なく遺跡が存続しており、当該期の生活圏と捉えられる可能性がある。一方、海岸側の遺跡分布は、段丘先端部の葛登支岬を中心としておりいずれも未調査であるが複数の遺跡の所在が知られている。そのうち、当別2遺跡・当別3遺跡・当別4遺跡などで縄文試合早期～前期の資料、葛登志遺跡・当別5遺跡などで統縄文時代恵山式期の資料が得られている。このほか、茂辺地川を挟んだ対岸、函館湾岸に沿って南北4kmに渡り連なる海岸段丘上では中世の館跡である茂別館跡（国指定史跡）や矢不來台場跡等の歴史時代遺跡、あるいは茂別遺跡・矢不來遺跡・館野遺跡など先史遺跡が数多く所在している。同段丘上では、函館江差自動車道建設事業あるいは国道整備事業等に伴い複数の遺跡について緊急発掘調査が平成3（1991）年から平成21（2009）年にかけて上磯町教育委員会・財団法人北海道埋蔵文化財センターによって実施されている。また、当別川対岸に連なる海岸段丘上の三ツ石2遺跡・フコマ野遺跡などの先史遺跡についても、農道整備事業に伴う緊急発掘調査が平成元（1989）年から平成9（1997）年にかけて上磯町教育委員会によって実施されている。

5 調査方法の概要

(1) 調査区の設定と基本層序

調査区の設定は、北海道開発局函館開発建設部作製の「函館江差自動車道 上磯町茂辺地当別開測量用地平面図」を使用し、公共座標を基準に調査区を設定した。調査区のY軸を平面直角座標の北、X軸を同じく東とし、5m方眼の大グリッドを基準区画として設定し、X方向へはAから、Y方向へは1から順次番号を付した。表記方法は「X-Y」の順となり、基点となるグリッドはA-1である。例えば、基点から東に60m、北に100mの位置にあるグリッドについては「L-20」のように表記する。基点の座標値はX=-248725.000、Y=27860.000である。大グリッドはさらに1×1mの小グリッドに25分割した。小グリッド名は南西隅を起点とし1、南東隅を5、北西隅を21、北東隅を25として、必要ある時は大グリッドに枝番として付して表記した(例:M-30-18)。基本層序は以下のとおりである。

I層:表土 II層:暗褐色土、黄褐色火山灰・乳白色火山灰を部分的に含む。

III層:黒色腐植土(遺物包含層) IV層:漸移層 V層:ローム層

(2) 調査及び整理方法

I層を重機で除去した後、鋤簾・スコップ・移植ごてを用いて人力で掘り下げた。遺物は出土位置情報を付けて取り上げた。位置・層位の別なく基本情報として大グリッド名を付し、加えて遺構出土遺物は各遺構ごと、包含層出土遺物は小グリッドごとに取り上げそれに付随する位置情報を付した。さらに、出土遺物のうち詳細な出土地点の情報を要するものに関しては、小グリッド南西隅を起点とし、東西、南北方向の位置をcm単位で計測し標高値を付けて取り上げた。

遺構の調査は、堅穴住居跡および大型の遺構は土層観察用のベルトを設定、土坑等小規模な遺構については覆土を半掘し土層観察面を残し段階的に掘り下げた。調査進捗に応じ適宜縮尺1/20(微細図は1/10)を基本とする平面・断面図等を作成するとともに、35ミリデジタル一眼レフカメラを使用し、土層堆積状況、遺構検出状況、完掘状況、遺物出土状況、作業状況などを記録した。

以上の現場記録等については、トータルステーションおよびデータコレクター、管理アプリケーションである遺跡管理システムを適宜援用しデジタル化し、作業の効率化・円滑化に努めた。

整理作業は発掘作業終了後に行った。遺物については、洗浄、注記、分類、台帳の作成、集計作業等を行った。土器は接合・復元作業を行い、掲載遺物について選別し実測図作成・浄書トレース、拓影転写・写真撮影を行い図化した。石器は計測作業後に実測図を作成し、浄書トレース・写真撮影を行い図化した。整理作業終了後の遺物は遺構出土のものは遺構ごと、包含層出土のものは、土器は出土グリッドごとに、石器は器種ごとに区分し収納した。

遺構は現場で記録した平面図、土層図、断面図等を精査整理し浄書を行い、デジタルトレースして報告書掲載図面を作成した。調査時撮影写真等の記録類を整理し報告書を作成した。

(3) 遺物の分類

出土資料について、土器・剥片を素材とする石器等・礫を素材とする石器等・製品類に大別し、それぞれを次頁の通り分類した。本書における文・表中の記号表記はこれに準拠する。

なお、既刊である北斗市茂辺地4遺跡発掘調査報告書(2015)における分類を基本的に踏襲するものであるが、本遺跡における出土状況に即し一部追加・再分類等の改訂を行っている。

土器

I群 縄文時代早期

- A類 前半
- B類 後半

II群 縄文時代前期

- A類 前半
- B類 後半：円筒下層式に相当するもの

III群 縄文時代中期

- A類 前半
 - 1種 円筒上層 a～c 式に相当するもの
 - 2種 円筒上層 d～e 式・見晴町式に相当するもの
- B類 後半
 - 1種 複林式・大安在B式に相当するもの
 - 2種 ノグツブⅡ式・鎌瓦台式に相当するもの
 - 3種 大木系に相当するもの

IV群 縄文時代後期

- A類 初頭
 - 1種 天祐寺式・在地系の土器群に相当するもの
 - a 天祐寺式（古）。覆状貼付帯が多条で口頭に無文帯を持たないもの

- b 天祐寺式（新）。文様帯が口縁部に収められ、頸部に無文帯をもつもの
- c 天祐寺式に後続する土器群で、胴部文様帯をもたないもの

- 2種 大木系およびその後続型式に相当するもの
- B類 前葉

- 1種 十腰内Ⅰ式相当型式およびその前段階
 - a 沈線を主体とする。十腰内Ⅰ式の前段階に相当するもの
 - b 大津式・白坂3式・十腰内Ⅰ式に相当するもの

- C類 中葉
 - 1種 ウサクマイC式・手稲式・十腰内Ⅱ式に相当するもの

- D類 後葉
 - 1種 堂林式・十腰内Ⅳ式に相当するもの
 - 2種 御殿山式・湯の里3式・十腰内Ⅴ式に相当するもの

V群 縄文時代晚期

剥片石器等

剥片石器

I群 尖頭器類

- A類 石鏃（全長が概ね5cm以下のもの）
 - 1 有茎のもの
 - 2 無茎のもの
 - 3 木葉形・楕円形のもの
- B類 石槍（全長が5cm以上のもの）
 - 1 有茎
 - 2 無茎
 - 3 その他

II群 石鏃

- 1 棒状のもの
- 2 つまみ部を有するもの
- 3 剥片の一部に鏃部を有するもの
- 4 石鏃の転用品

III群 削器・搔器類

- A類 石匙
 - 1 縦長のもの
 - 2 横長のもの

- B類 スクレイパー類

- C類 篋状石器
 - 1 盤状のもの
 - 2 短冊状のもの

IV群 模型石器

素材・剥片など

- V群 素材・調整品
 - A類 粗工調整品
 - 両面調整石器など、素材となる石器の両面あるいは片面に粗い剥離加工の施されるもので、石核・剥片石器未製品の可能性を有するものを含む

- B類 石核

VI群 剥片・原石

- A類 R F（加工痕のある剥片）
- B類 U F（使用痕のある剥片）
- C類 剥片（砕片・チップを含む）
- D類 原石（剥片石器素材）

礎石器等

礎石器

I群 石斧類

- A類 磨製石斧
- B類 石ノミ

II群 敲磨器類

- A類 擦石
- B類 扁平打製石器
- C類 北海道式石冠
- D類 敲石
- E類 凹石
- F類 敲磨器
- G類 石鋸

III群 石鐘

IV群 石皿類

- A類 石皿
- B類 台石
- C類 砥石

素材・礫片など

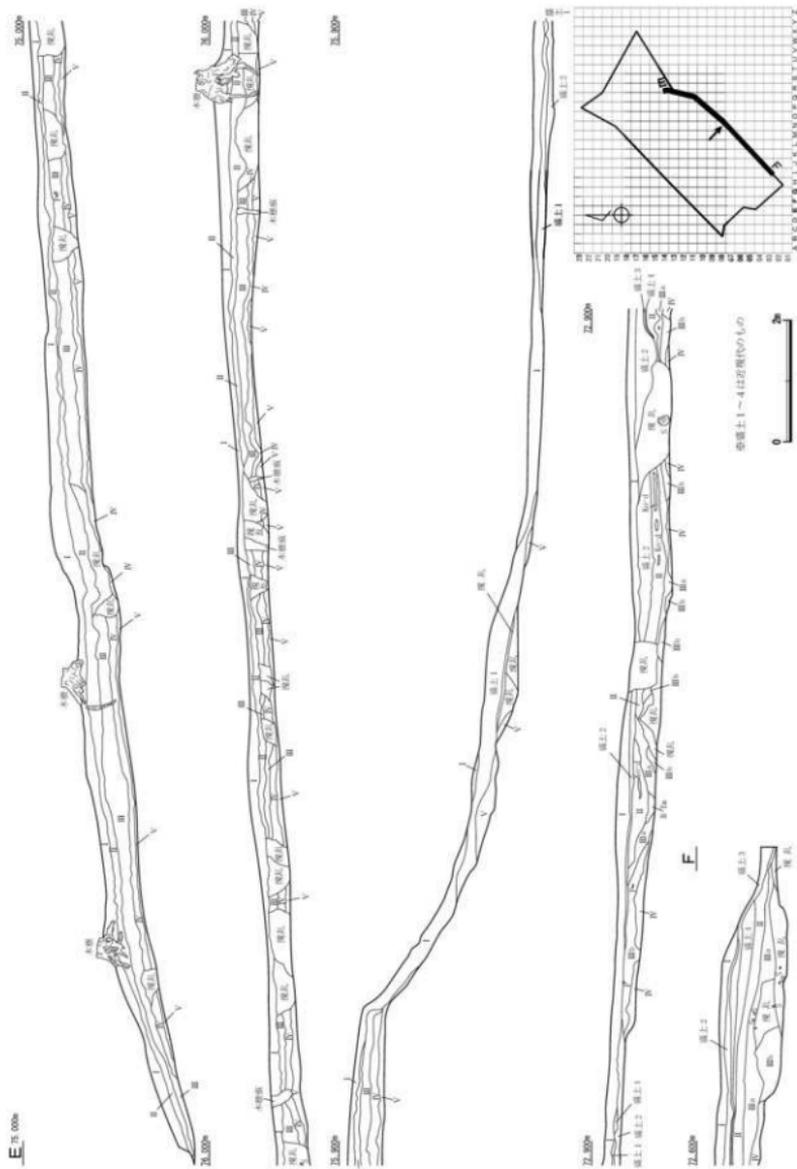
- V群 礫・礫片
 - A類 加工痕のある礫
 - B類 使用痕のある礫
 - C類 礫・礫片

製品類

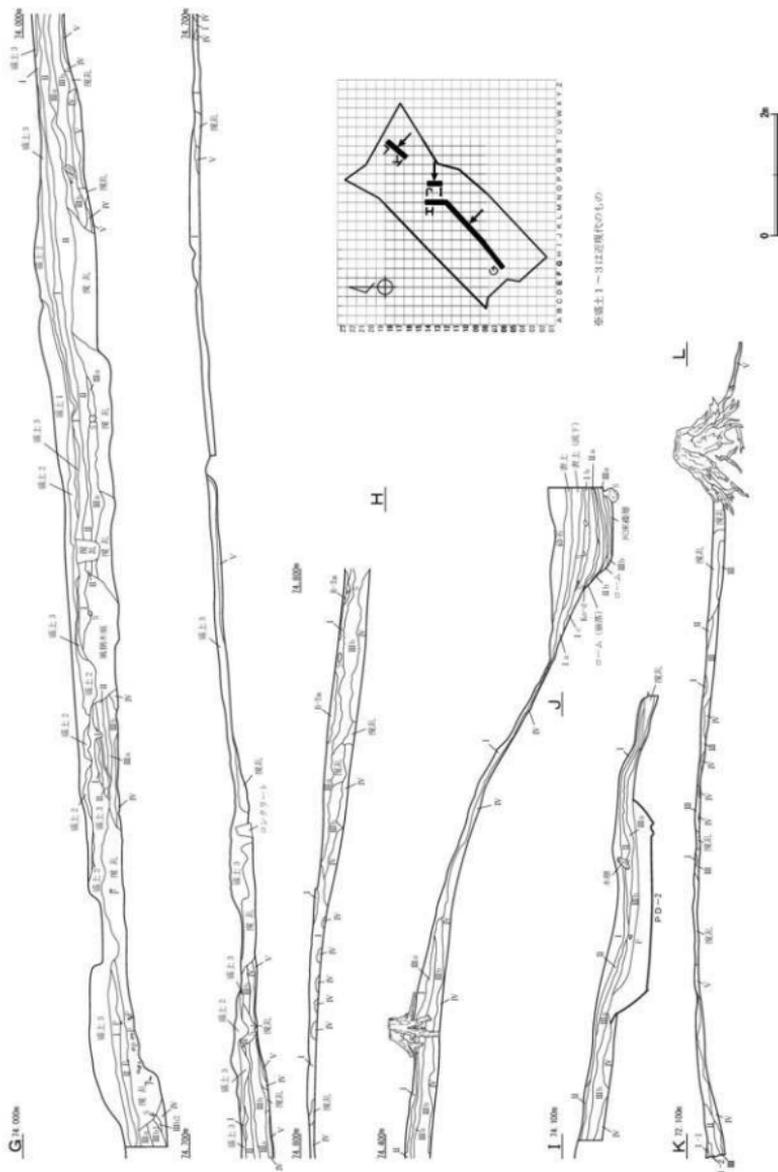
I群 土製品

- A類 土偶
- B類 その他

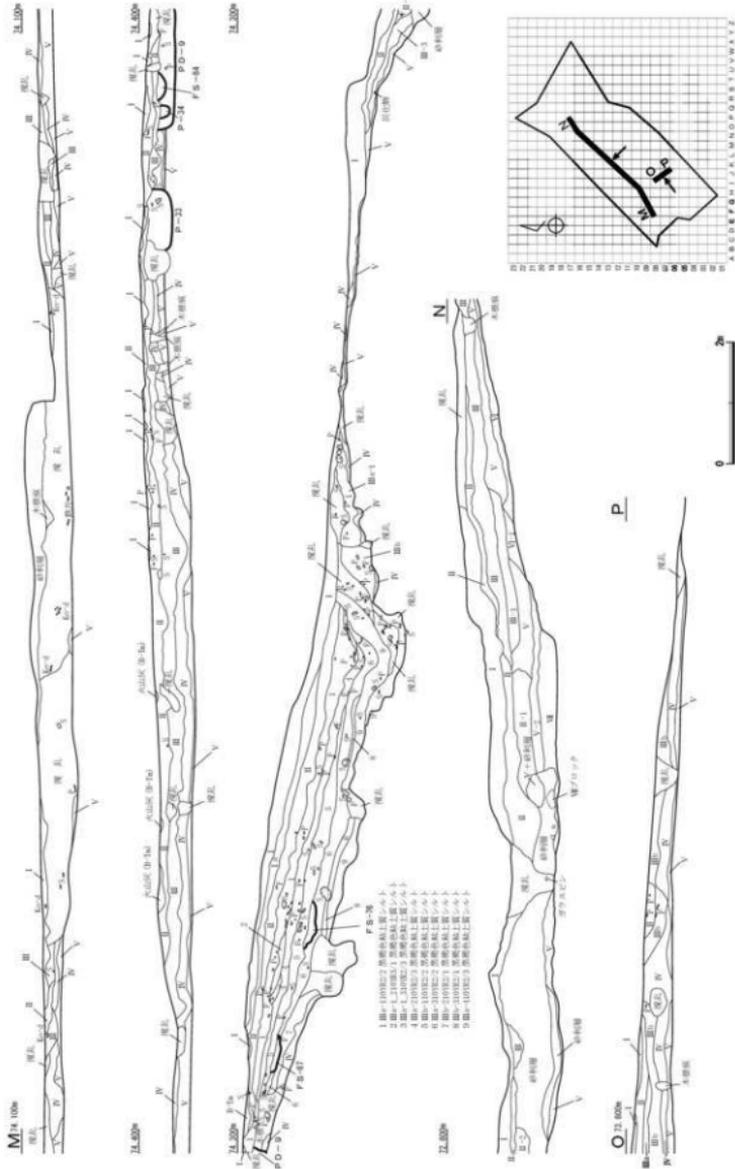
II群 石製品



第1-5図 土層堆積図(2) (平成26年度調査区内)



第1-6図 土層堆積図(3) (平成26年度調査区内)



第1-7図 土層堆積図(4) (平成26年度調査区内)

II 発掘調査における成果

1 調査の概要(第II-1図)

I-4(2)において述べた通り、村前ノ沢遺跡は、南北を当別側の谷底平野へと下る沢に挟まれた、南東方向にのびる舌状台地上に立地している。調査区はその基部にあたり、さらにN-15グリッド周辺を始端とし東へと延び、後背高地から流れ出る水流に因る開析谷(支沢)が走る。

支沢北側では、遺構・遺物ともに見つからなかった。本来遺物包含層である黒褐色土層(III層)および直下のローム層(V層)上面は堆積が乱れ段丘堆積物由来の礫が多数混じり、層間の漸移層(IV層)の発達も不良であり、後背高地からの水流等による断続的な浸食が考えられる。それら地形的・自然的要因に加え、昭和10~20年代の空撮写真で確認すると同地には建築物が設置されていることから、整地・削平等の人為的要因が当地の遺存状況に影響しているものと想定される。

支沢南側は、舌状台地尾根周辺の平坦面と、そこをピークに南北の沢へと下る緩斜面からなる。北側斜面は幅10mほどで支沢に切られており、比高差は約1mである。南側は、中腹に幅20mほどの著しい削平(削平部埋土中の現代遺物等より勘案して、昭和20年代以前の整地・造成…I-4(1)参照)を受けており正確な旧地形は不明であるが、残存部より推測して、尾根から沢へ緩やかに下る緩斜面を呈していたものと想定される。調査区南端沢沿いは削平を免れていたが、多数の風倒木痕により著しい攪乱を受けており、土層の堆積も不均質であった。当時も現況の沢沿いと同様湿地帯であり、灌木の繁茂する環境であったと想定される。

遺構は、尾根部平坦面とその北側、支沢沿いを中心に分布しており、竪穴住居跡10軒、土坑45基、落し穴2基、焼土・屋外炉等が検出された。なお平坦面南側は削平部間際まで遺構が存在しており、喪失した南側の斜面まで分布域が広がっていた可能性がある。

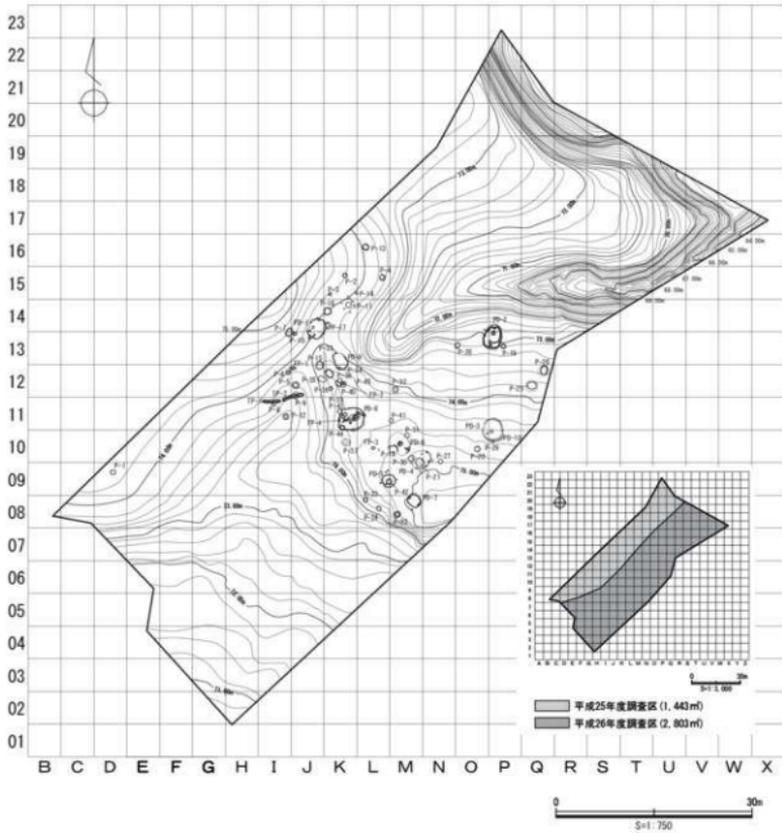
竪穴住居跡は、①縄文時代中期後半にみられる、小形~中形の卵形あるいは隅丸方形の平面形を呈しほぼ垂直に立つ壁を持つタイプと、②縄文時代後期初頭以降にみられる、不整形の平面形を呈し、皿状の浅い掘り込みを持つタイプにおおまかに分けられる。前者は尾根から北側の支沢沿い、後者は尾根頂部~南側とその分布域は一部重複しながらも分かれるようである。

土坑は、円形の平面形と直立する壁を持つ円鍋様の形状を呈するものが定形的なタイプとして検出されたほか、フラスコ状土坑が2基検出されている。円鍋様の土坑については、近隣に位置する茂辺地4遺跡における縄文時代後期初頭集落においても検出されている。

遺物は169,137点出土している。遺物の分布は調査区全域におよぶが、そのほとんどが遺構外の出土品であり、特に支沢始端の窪地およびその山側後背の斜面の密度が高い。土器の占める割合が出土点数で86.9%と極めて高く、うち最も多いものは縄文時代中期前葉~中葉、円筒上層式の前半に相当する資料である(これらの分布域では、焼成粘土塊も広く出土している)。IV章において後述するが、これらは調査区内検出の遺構群の帰属時期に先行し一致しない。これに次ぐのが、縄文時代中期後半~後期初頭の土器群であり、出土範囲は各時期の遺構分布域と概ね一致する。石器は、剥片石器ではスクレイパーが最も多く、そのほか石鏃類・鏃状石器等が出土しているが、製品数に比して剥片・チップ等石器製作過程に係る遺物の数が少ない。礫石器では扁平打製石器・北海道式石冠を含む擦石類が最も多く、その他敲石・石皿などが出土している。その他、板状土偶・環状土製品などの精神文化に係る所謂「第二の道具」を含む土製品や石製品も出土している。

表1 検出遺構集計

	竪穴住居跡	土坑	落し穴	屋外炉	焼土
平成25年度	1	17	2	1	47
平成26年度	9	28	-	3	43
計	10	45	2	4	90



第II-1図 村前ノ沢遺跡遺構配置図(平成25・26年度)

II 発掘調査における成果

表2 出土遺物集計

		土器	石制 器片	剥片 類	礫 石器	礫	土 製品	石 製品	粘 土 焼 成	合計
遺構 外	1層	5172	145	378	53	27	4	-	19	5798
	2層	1230	17	42	8	1	-	-	-	1298
	3層	122863	2649	5753	2122	6651	39	18	383	140518
	敷土	8731	157	501	123	67	6	2	29	9616
	表土・その他	6180	139	313	21	420	-	-	12	7085
小計		144196	3107	6987	2327	7166	69	20	443	164315
遺構 内	竪穴住居跡	1579	39	203	108	348	-	1	4	2282
	土坑	598	6	387	47	71	1	-	2	1112
	その他遺構	676	15	614	39	79	-	3	2	1428
	小計	2853	60	1204	194	498	1	4	8	4822
合計		147049	3167	8191	2521	7664	70	24	451	169137

2 遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡 (PD)

PD-1 (第II-2~5図、写真図版2・7)

遺構 平成25年度発掘区ほぼ中央、標高74.0mの舌状台地根基部の緩斜面に位置する。IV層面で検出した。P-17と重複しこちらのほうが新しい。平面形は長軸約3mの隅丸方形で、壁はほぼ垂直あるいはやや開きながら立ち上がる。床面はほぼ水平に掘り込まれており、深さは約10~25cm。住居西側・斜面上位の壁がわずかに高い。覆土は床面直上まで自然堆積。覆土中で採取した炭化物の放射性炭素年代測定値が3,885±20BP(縄文時代後期初頭~前葉)と、出土資料より新しい数値を示していることから、遺構の遺棄から埋没まで時間差を有するようである。住居ほぼ中央で焼土が検出されており(F-1)、石組等の構造物はもたないが、屋内炉の可能性はある。附属するピットは9基。うち床面長軸上の南北壁際に位置する2基(SP-4・8)が深い掘り込みをもち、主柱穴であったと想定される。また、南側で住居と接するSP-9は、その位置・形状より、縄文時代中期後葉の竪穴住居にみられる先端ピットあるいはそれに類するものであると想定される。

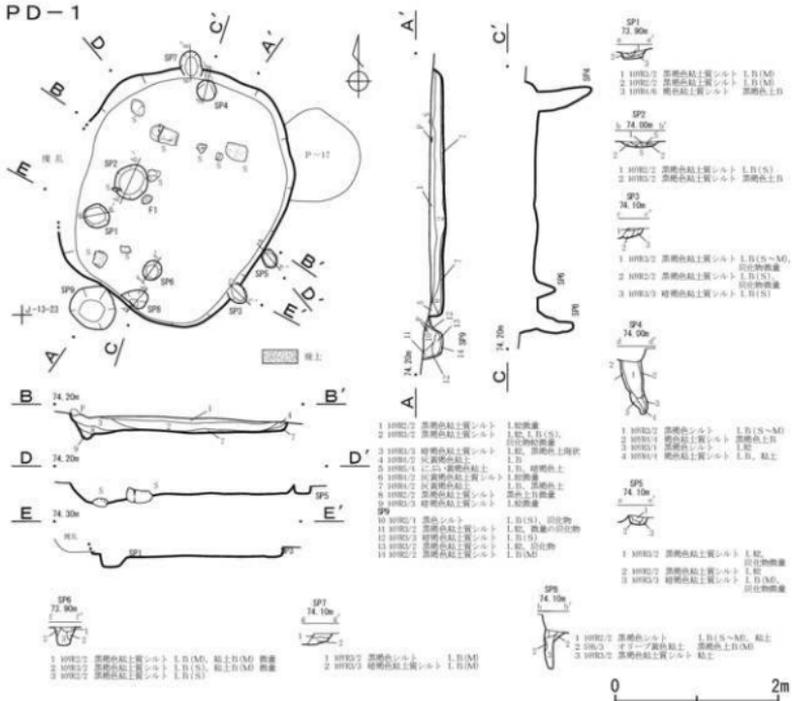
遺物 土器86点、剥片石器3点、礫石器36点など、総計178点が出土した。

1~6は土器。4はSP-9からの出土であり、他はいずれも覆土からの出土。1~3はⅢ群A類1種、円筒上層式前半。4・5はⅢ群B類。4は原体の斜め回転押圧による横走縄文の施される口縁部、5は縄線文の施された垂下微隆起のある胴部破片でいずれもノダップⅡ式段階。6はⅣ群A類の底部。7・8は剥片石器。覆土中より出土した珪質頁岩製のスクレイパーである。縦長剥片を素材とし一側縁に片面加工により調整が施される。いずれも礫皮を残す。9~20は礫石器。9・10は礫石。双方の上下端部と側縁に、敲打痕がみられる。石質は9が強珪化岩、10は変形泥岩。11~15は擦石。11は広い面に使用痕が残るもの。石質は変形泥岩。12・13は剥離により使用面を作したのもの。14はやや厚みのある礫の側縁に広い擦面をもつもの。15は北海道式石冠。石質は13・14が流紋岩、12・15は普通角閃石安山岩。16は使用痕のある礫。SP-2からの出土で覆土出土のものと同接した。石質は変形砂岩。17~20は石皿。それぞれに欠損しているが滑沢な使用痕がみられる。石質は17が変形砂岩、18がゲイサイト、19・20が角閃石安山岩。出土層位は、9・10・13が覆土、11・19は床直、12・14~18・20は床面。

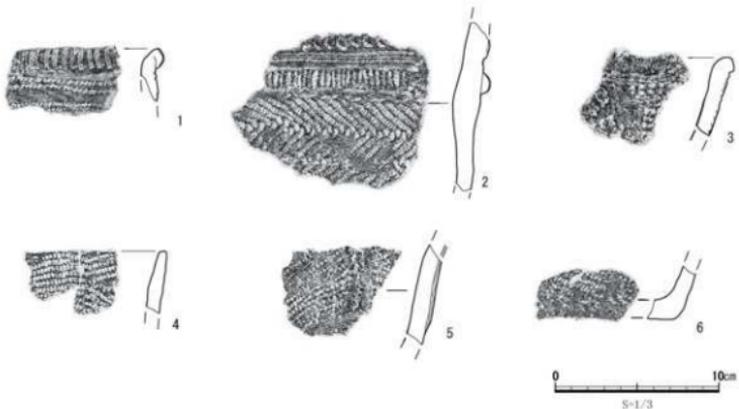
時期 住居形状および附属ピット中出土遺物より、縄文時代中期後葉と考えられる。

PD-1出土遺物集計

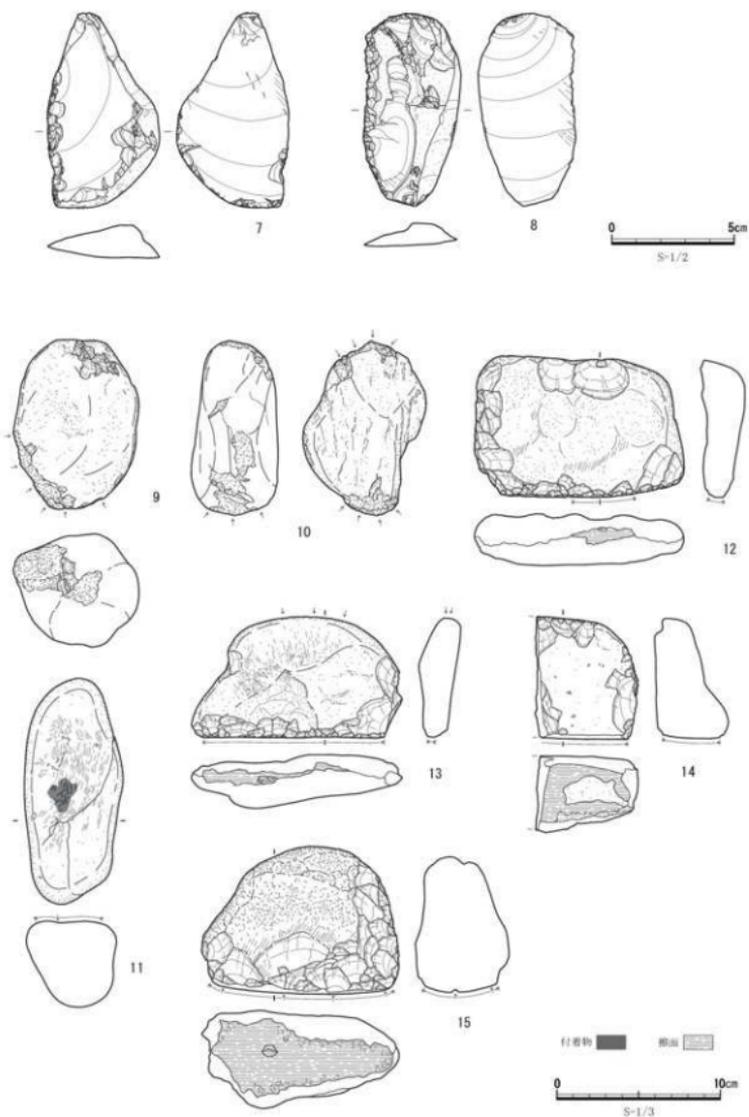
	土器				イス パケ イ レ	剥 片	礫 石	式 北 海 道 式 礫 石	礫 石	石 皿 類	礫 石 の 器 片	礫 石 の 器 片 ・ 片	合計
	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	計									
覆土	5	40	17	62	3	10	3	6	13	1	2	25	121
床面		1		1		17	3	2		6	1	1	31
附属P		2	21	23									23
合計	5	43	38	86	3	27	6	7	13	7	3	26	178



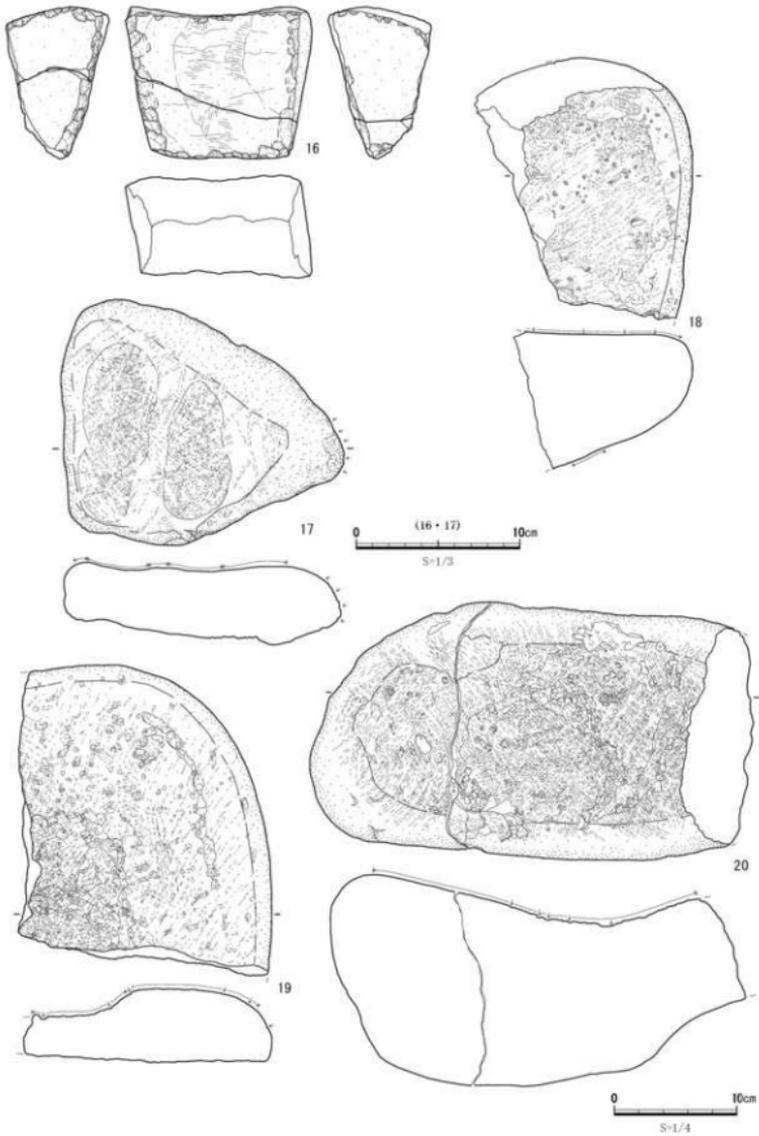
第II-2図 PD-1平面図・土層断面図



第II-3図 PD-1出土遺物(1)



第II-4図 PD-1出土遺物(2)



第II-5図 PD-1出土遺物(3)

PD-2 (第II-6~8図、写真図版2・8)

遺構 平成26年度発掘調査区中央から東より、標高72.8m~73.2mの沢縁辺の平坦面に位置する。P-19と近接する。IV層面で検出した。平面形は楕円形で、壁は長辺ではほぼ垂直に、短辺ではゆるやかに開きながら立ち上がる。深さは約40cm。床面はほぼ平坦。覆土は自然堆積による。覆土中より採取した炭化物の放射性炭素年代測定値が、 $4,040 \pm 20\text{BP}$ (縄文時代後期初頭)と床面出土資料より新しい数値を示していることから、遺構の遺棄から埋没まで時間差を有するようである。住居長軸上、中央からやや北よりに地床が検出されている(F-1)。附属するピットは6基検出されているが、柱穴配置は判然としない。長軸上北側壁よりに皿状のピットが検出されており、床面より縄文時代中期後葉・Ⅲ群B類(大安在B式)の個体が出土している(第II-7図-4)ことも併せ、同時期の堅穴住居にみられる尖端ピットに類する附属施設であると想定される。周溝は壁に沿うものとその内周を巡るもの、合わせて2条確認されており、増築が行われた可能性がある。

遺物 土器270点、剥片石器3点、礫石器8点など、総計329点が出土した。

1~9は土器。4は床面、他は覆土からの出土。1・2はⅢ群A類。いずれも口縁部片で、1は馬蹄状縄圧痕の施される円筒上層式前半、2は細い粘土紐貼付により施文する円筒上層式後半の資料。3~5はⅢ群B類。隆帯および縄線文により胴部上半に格子状のモチーフを描く群で、大安在B式に相当する。4は床面に貼り付くような状態で検出された(第II-6図参照)もので、本遺構の時期推定のメルクマールとなる個体。5は底部。いずれも原体の斜め回転押圧による横走縄文を地文とする。6~9はⅣ群A類、後期初頭の在地系土器。10~12は剥片石器。10・11は床直上、12は覆土より出土した。すべて縦長剥片を素材とする珪質頁岩製のスクレイパーである。一側縁に片面加工による調整が施されるもので、10は平行する一辺に微細刻離が認められる。10・12は先端、11は基部を欠損する。13~17は礫石器。13・16は敲石。13は小ぶりだが周縁面に敲打痕が遺る。石質は形質頁岩。16は両側縁に敲打痕があり、被熱がみられる。変形砂岩製。14・15は擦石。14は自然礫の稜線を利用した使用面をもつもの。変形砂岩製。15は長軸の端部に打ち欠きがみられ、一稜に擦痕が遺るもの。変形砂岩製。17は使用痕の遺る礫。薄手の自然礫を使用。変形砂岩製。14~16は覆土、17は床直、13は床面からの出土。

時期 床面出土遺物より縄文時代中期後葉、大安在B式期と考えられる。

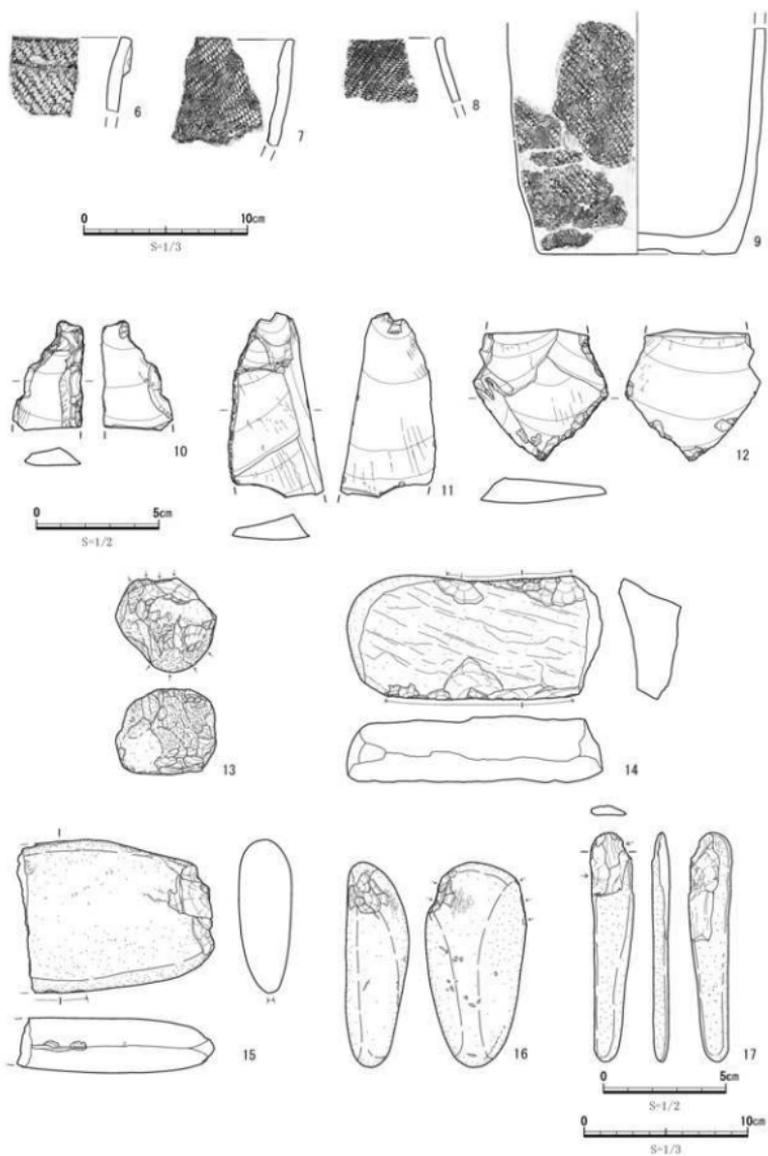
PD-2出土遺物集計

	土器				石 器	イ タ リ ン 石	骨 工 具	剥 片 石 器	礫 石 器	敲 石	石 皿 類	縄 織 片	合 計
	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	計									
覆土	1	219	41	261	1			6	2	2	1	21	305
床・床直		6	1	7			2	1	8		1		21
附属品		2		2									2
埋土											1		1
合計	1	227	42	270	1	2	1	14	2	2	1	22	329

PD-3・10 (第II-9~11図、写真図版2・9)

遺構 平成26年度発掘調査区中央から東側、標高74.4m~74.6mの平坦面に位置している。南側にはP-29、南西側にP-20が近接する。V層面で検出した。当初単一の住居と想定し調査を進めたが、時期の異なる二つの住居が重複したものであることが後に判明した。ここでは、うち新しいものをPD-3、古いものをPD-10と呼称して詳述する。

(PD-3) PD-10 上部の大部分を切るように構築されている。前述の通り、調査開始時同一住居の想定で作業を進めたため、検出できた壁・床面は東側の一部のみである。東側壁際に一部攪乱を受ける。確認された部分から平面形は円形あるいは長円形を呈するものと考えられ、壁は開きながらやや緩やかに立ち上がる。深さは約24cm、覆土は自然堆積による。調査時、覆土中より検出された焼土2カ所(F-1・F-2)は本住居跡に関連するものと考えられる。



第II-8図 PD-2出土遺物(2)

(PD-10) 上部の大部分を切るようにPD-3が構築されている。南側壁際にはP-29が重複しているが新旧は不明である。南西側にはP-20が近接する。V層面で検出された。平面形は北側でやや幅が狭くなる卵型に近い形状を呈する。壁は南東側でほぼ垂直に、北西側ではややゆるやかに立ち上がる。深さは約31cm、床面はほぼ平坦である。覆土は自然体積による。住居長軸上中央からやや北側に浅い掘り込みの地床炉(F-1)が検出されている。北側壁際には皿状のピット(SP-1)があり、同時期の住居にみられる先端ピットに類する付属施設であると考えられる。また、ピットの南側には平行するように2個の大型の礎が検出されている。

遺物 土器228点、剥片石器10点、礫石器14点など総計353点が出土した。

1～7は土器。いずれも覆土からの出土。1はIV群B類の深鉢で、覆土上位(PD-3覆土相当層)で集中して出土した資料を接合・復元したもの。大型の深鉢で、胴部上半に無節L原体による横走縄文と、集合沈線・平行沈線による弧状・クランク状文様を施す。胴部下半は無文である。縄文時代後期前葉、大津式に相当する。2～7は後期初頭、IV群A類の土器片。2～5はIV群A類1種で、在地系の資料。2は口縁で、端部に無文帯をもち箍状に縄線文を2条巡らす。6・7はIV群A類2種。いずれも地は無文であり、6は沈線で施文されている。7は底部で、底面に葉脈痕が残る。8～10は剥片石器。覆土中より出土したもので、すべて珪質頁岩製である。8・9はスクレイパー、縦長剥片を素材とし、一側縁に片面加工により調整が施される。8は一端が欠損、9は礫皮を残す。10は両面調整石器、両面に粗い加工が施される。11～14は礫石器。11・12は敲石。11は、長礫の端部に敲打痕が集中したもの。広い面にも擦痕・打痕がみられる。12は稜線上に敲打痕が遺るもの。13・14は擦石。13は扁平礫の側縁に擦面をもつ。14は長軸の側縁に擦痕が遺り、石鋸の可能性を考えたが、使用面の状態から擦石に分類した。石質は11がゲイサイト、12・13は変形砂岩、14はドレライト。全て、覆土からの出土。

時期 PD-3については遺構形状・出土遺物より縄文時代後期初頭～前葉、PD-10については遺構形状・付属施設等より縄文時代中期後葉と考えられる。

PD-3・PD-10出土遺物集計(床面・床直はPD-10のもの)

	土器			石 器	イ ス パ カ レ	調 製 工	・ 破 片 類	R P	石 槌	剥 片	礫 石	敲 石	石 皿 類	縄 線 片 ・ -	合 計
	III	IV	計												
覆土・Ⅲ	12	216	222	1	3	1	2	1	1	42	2	6	3	23	367
床面										3				2	5
礎土										16					16
床直・床	6		6	2	3			4		3				1	25
合計	18	216	228	3	6	1	2	5	1	64	2	6	6	29	333

PD-4 (第II-12・13図、写真図版2・10)

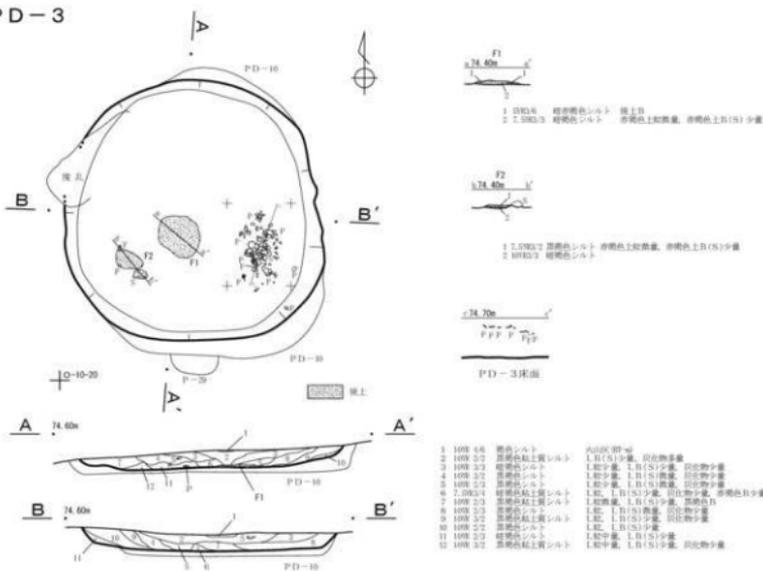
遺構 平成26年度発掘調査区中央よりやや南西側、標高74.9m～75.0mの緩斜面に位置する。P-21・30と重複し、P-21より新しく、P-30より古い。IV層面で検出した。平面形は北西側で一部風倒木、重複遺構(P-30)により喪失しているが楕円形と思われる。壁は開くように立ち上がる。深さは約20cmで南西側ではほとんど立ち上がりはなく2cm程度である。床面は貼床が3か所で検出され黒褐色土と黄褐色粘土の混土で表面には凹凸がある。覆土は自然堆積である。炉は2箇所検出され床面中央よりやや南西側、重複遺構であるP-21の覆土上位(本遺構床面)に貼床が施され地床炉(F-1)が設けられている。床面の北側には石囲炉(F-2)と思われるが炉石は2個しかなく北西側の風倒木による攪乱の為平面形は不明である。付属するピットは9基検出され、いずれも柱穴と考えられる。SP-1～3、SP-5・9は壁際を巡る。SP-6・7は外柱穴の可能性がある。

遺物 土器123点、剥片石器6点、礫石器6点など総計232点が出土した。

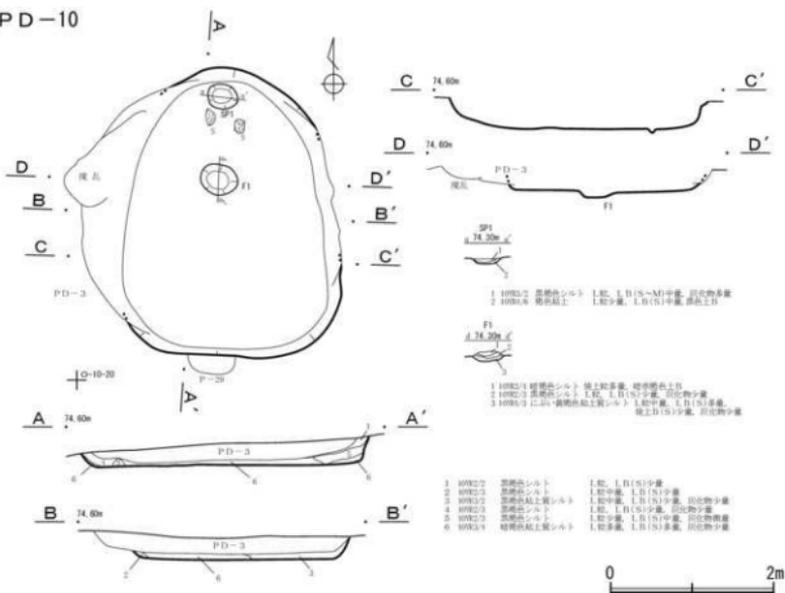
1～7は土器。いずれも覆土からの出土。1はIII群A類。ほぼ等間隔で水平に回転押したRL-LR結束第一種による矢羽根状縄文が施文された円筒上層式前半期の胴部。2はIII群B類。単節縄による横走

II 発掘調査における成果

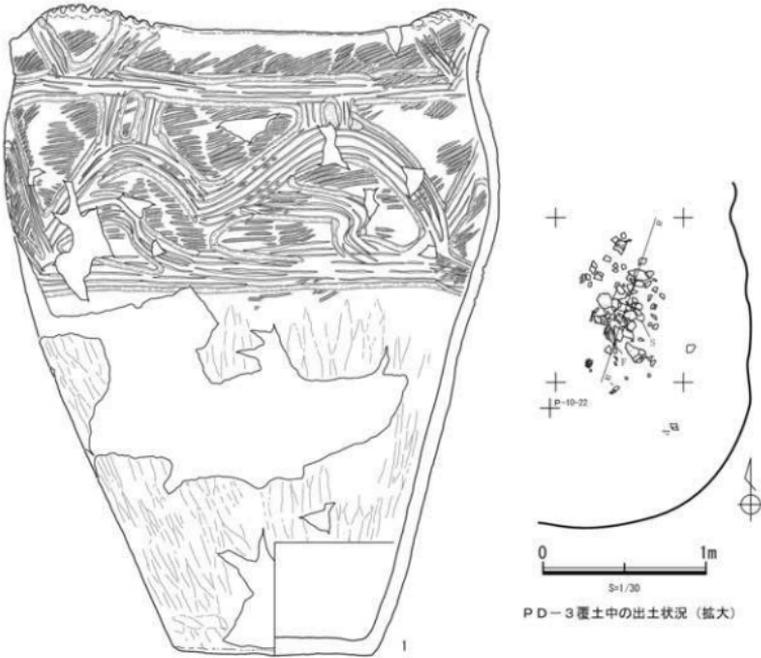
PD-3



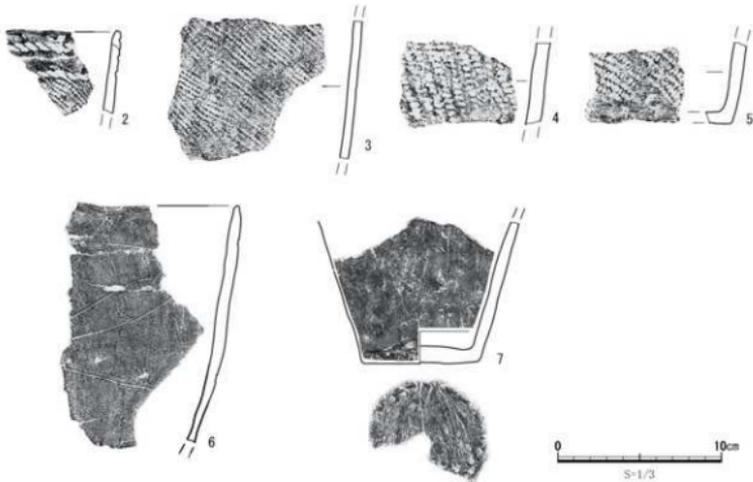
PD-10



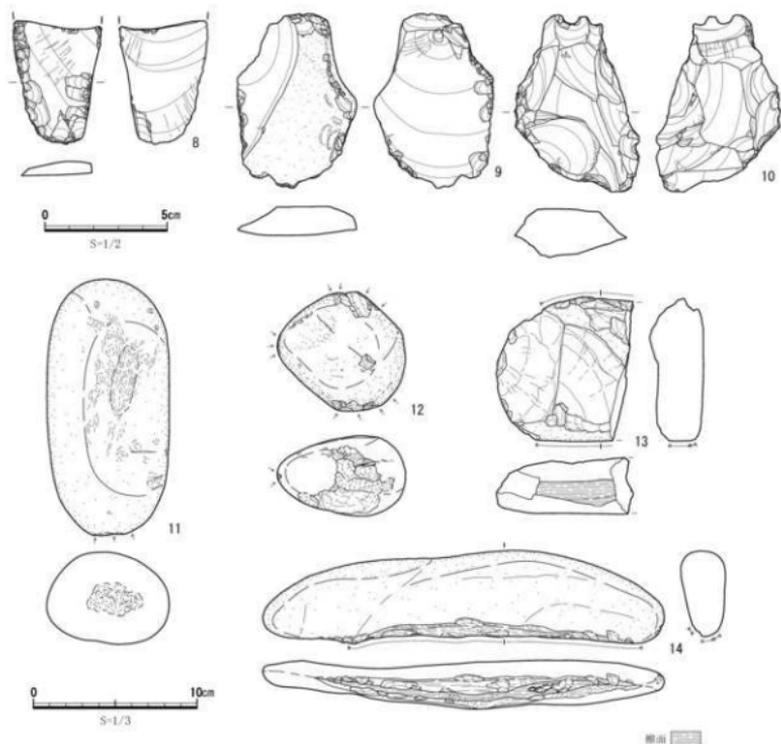
第II-9図 PD-3・10平面図・土層断面図



PD-3 覆土中の出土状況 (拡大)



第II-10図 PD-3・10出土遺物(1)

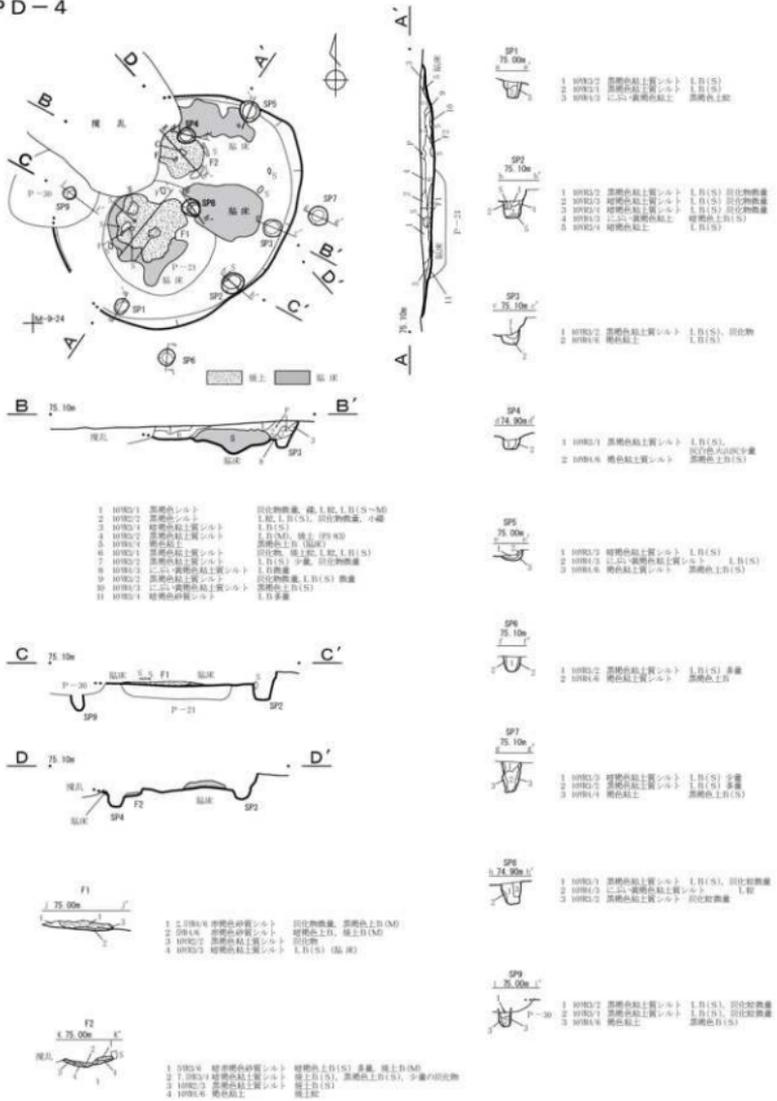


第II-11図 PD-3・10出土遺物(2)

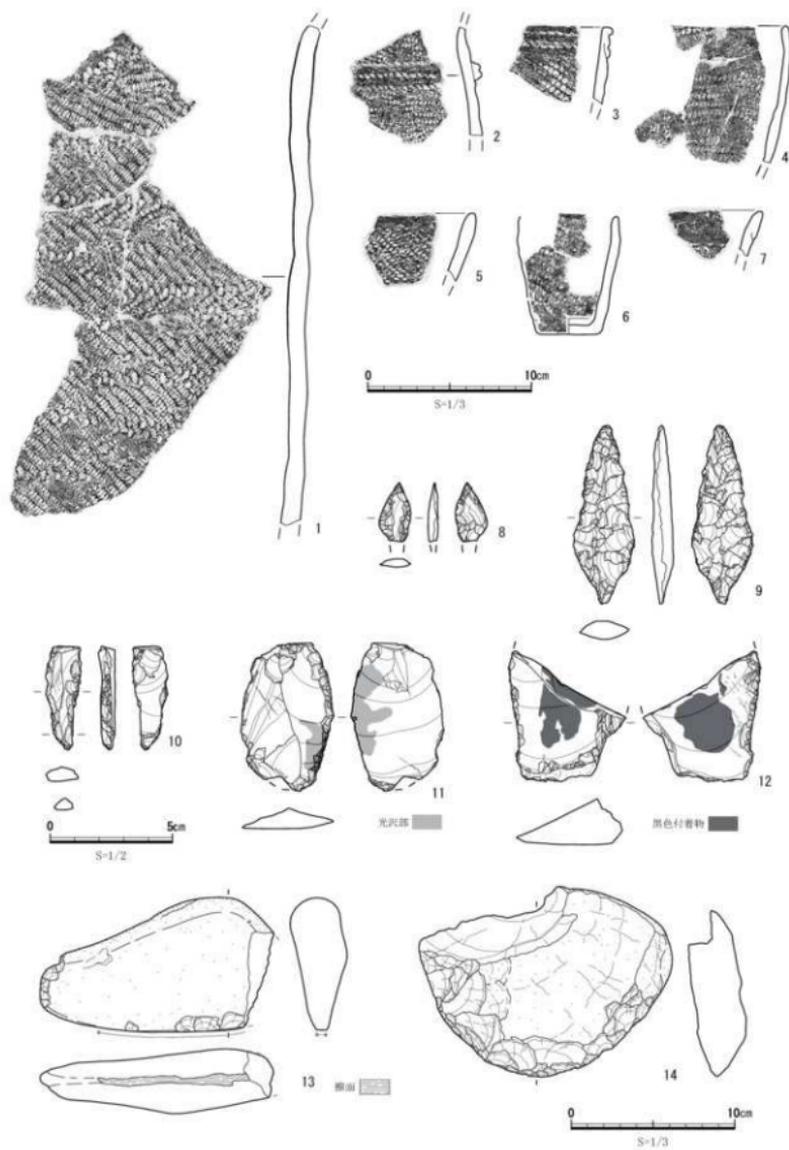
縄文を地文とし、頂部ならびに上下両端に縄線文を沿わせた楕状隆帯を巡らす胴部破片で、大安在B式に相当する。3～7はIV群A類。3～5、ならびに7は口縁部。6は小型の深鉢。8～12は剥片石器。8は攪乱、9～11は覆土、12は床面より出土した。すべて珪質頁岩製。8は凸基有茎の石鎌。小型の薄い剥片の周縁を両面加工により整形したもので基部を欠損する。9は有茎の石槍。両面全面に丁寧な調整加工による整形が施されている。10は石錐。縦長剥片の両側縁に片面加工による整形が施され、端部に機能部が作出される。11・12はスクレイパー。11は縦長剥片の一辺に浅い片面加工が施されるもので、表裏両面に光沢をもつ部分が認められる。12は一側縁の両面に浅い加工が施されるもので基部を大きく欠損する。表裏両面から欠損部断面にかけて黒色の付着物が認められる。

13・14は礫石器。13は、やや広い擦面をもつ擦石。長軸の一端に打ち欠きがみられる。14は、加工痕のある礫。半円状に打ち欠き整形されるが、使用痕は不明瞭。石質は共に変形砂岩で、覆土からの出土。時期 出土遺物および遺構形状より、縄文時代後期初頭と考えられる。

PD-4



第II-12図 PD-4平面図・土層断面図



第II-13図 PD-4出土遺物

PD-4出土遺物集計

	土器			石 罫	石 槍	石 錘	イ ヌ バ ク レ	U F	剥 片	磨 石	敲 石	瓦 皿 類	磨 石 の 器 皿	陶 器 片	合 計
	III	IV	計												
覆土・皿	26	64	90		1	1	2		15	1	1	1	2	45	159
床直・床	1	9	10				1		3					8	22
附属P		6	6												6
焼土									4						4
覆瓦	8	9	17	1				1			1				21
合計	35	88	123	1	1	1	3	1	22	1	2	1	2	74	232

PD-5 (第II-14・15図、写真図版2・10)

遺構 平成26年度発掘調査区中央から南東寄り、標高74.8m~74.9mの平坦面に位置し、南側斜面に近接する。FS-78、P-42と重複しておりFS-78より古く、P-42より新しい。IV層面で検出した。平面形は不整形で、壁は緩やかな立ち上がりを見せるが、近代の攪乱等により遺構上面を削平されているため判然としない。床面の現存高は10cm~25cmと浅い皿状を呈しており、中央付近に向かって緩く傾斜する。覆土は自然堆積による。住居中央には貼床がなされ、これの南西寄りに3個の礎が「へ」の字状に配されて出土している。礎に被熱痕が有ること・礎列内側から焼土を検出したことから石囲炉と考えられる。附属するピットは南西の床面から1基、住居外の東西に各1基ずつ、北側に2基の計5基検出された。位置、規模から柱穴と考えられる。

P-42は本住居床面から検出された。覆土中から礎が3点出土しており、その内2点は本住居の石囲炉直下と重なる。当初沈み込み等住居屋内炉との関連を考えたが、炉内焼土および貼床に攪乱はみられず、覆土中礎にも炉石と異なり被熱痕は認められなかった。以上を勘案し別遺構としたが、構築位置・構築面等より本住居と何らかの関連をもつ可能性も考えられる。

遺物 土器119点、剥片9点、礎石器8点など総計143点が出土した。

1~3は土器で、いずれもIV群A類。1・3は床面直上、2は炉内焼土からの出土。地文は原体を縦回転押圧した斜行縄文で、天祐寺式ならびにそれに後続する在地系の土器群。1は半完形の深鉢で、口縁に隆帯・折返などを持たないが縄線文を籐状に1条巡らすもの。在地系土器群の中でも新しい時期に属する個体。2は口縁端部に厚め・幅広の隆帯を籐状に貼り付ける口縁部破片で、天祐寺式の古手に相当するもの。3は底部片。4~9は礎石器。4・5は敲石。4は端部、5は側縁や広い面に敲打痕が残る。6・7は擦石。炉の石組として配されており、使用後に転用されたものと考えられる。石質は4が強珪化岩、5が玄武岩、6がドレライト、7が変形砂岩。8はデイスイト製の北海道式石冠。9は砥石、変形砂岩製。出土層位は4・5・8は床直、6・7は床面、9は覆土。

時期 出土遺物および遺構形状より、縄文時代後期初頭と考えられる。

PD-5出土遺物集計

	土器			剥 片	磨 石	式 北 石 海 道 式	敲 石	瓦 皿 類	陶 器 片	合 計
	III	IV	計							
覆土	1	47	48	1						49
床直・床	3	64	67	6		1	2	1	7	84
附属P	1	1	2							2
伊・焼土	1	1	2	2	3			1		8
合計	6	113	119	9	3	1	2	2	7	143

PD-6 (第II-14・16図、写真図版2・11)

遺構 平成26年度発掘調査区中央よりやや南西側、標高74.7m~74.8m緩斜面に位置する。P-18・31と重複しいずれも本住居が古い。IV層面で黒褐色土の落ち込みを検出した。上面を著しく削平されており平面形・壁構造ともに判然としない。北側は特に削平が著しく、僅かに床面が確認できる程度で壁の

II 発掘調査における成果

立ち上がりは確認できない。さらに南側・南西側は風倒木による攪乱・重複遺構（P-18）により喪失しているが、南東側の平面形状・床面の残存部等から勘案して楕円形の平面形を呈するものと想定される。壁は、残存部は開くよう立ち上がる。床面はやや凹凸があるものの平坦である。覆土はほぼ喪失しているが、自然堆積と思われる。床面中央で石囲炉が検出されている（F-1）。平面形は円形または楕円形と思われるが、南東側の配石を欠く。遺物の項にて後述するが、これと住居主軸上に並んだ南東側で長襪（石皿としての使用痕あり）が石囲炉長軸と傾きを同じくして出土しており、対となる襪は無かったものの、後期初頭～前葉の竪穴住居にみられる平行配石の一翼であった可能性がある。F-2（焼土）は床面の南東側壁際 SP-1 の覆土の上位で検出した。付属するピットは1基検出した。

遺物 土器 202 点、剥片石器 2 点、礎石器 23 点など総計 302 点が出土した。

1～5は土器。2・3は床面直上、1・4・5は覆土からの出土。1～3はIV群B類。クランク状の沈線文、あるいは集合沈線・平行沈線により描かれる幾何学文を特徴とする土器群で、大津式に相当するもの。1は口縁部片、2・3は胴部片。4・5はIV群D類、堂林式に相当する資料。6・7は剥片石器。いずれも覆土より出土したもので6はメノウ製の平基有茎石鏃。両面全面に丁寧な調整加工が施された小型のもので、先端部はやや丸みをもつ。基部には黒色の付着物が認められる。7は珪質頁岩製のスクレイパー。縦長剥片を素材とし、一側縁に浅い片面加工により調整が施される。表裏両面に光沢をもつ部分が認められる。8～10は礎石器。8は両刃の磨製石斧。9は北海道式石冠で、擦面は平坦ではなく緩やかな凸面を呈する。いずれも覆土出土。10は石皿。住居主軸上の床面で出土しており、先述の通り配石の一翼であった可能性がある。石質は8がアオトラ製、9・10はドレライト。

時期 削平が著しく判然としないが、出土遺物より縄文時代後期前葉の可能性が高い。

PD-6出土遺物集計

	土器			石鏃	イヌパレ	R F	剥片	石斧	式七曲石冠	砥石	石皿	その他	礎石器	合計
	皿	IV	計											
覆土	10	156	166	1	1	1	7	1	2		3	3	41	229
床直・床	3	23	26				5	1			1	2	5	40
砂・焼土	2	5	7								4	5	16	32
覆土		3	3							1				4
合計	15	187	202	1	1	1	12	2	2	1	8	10	62	302

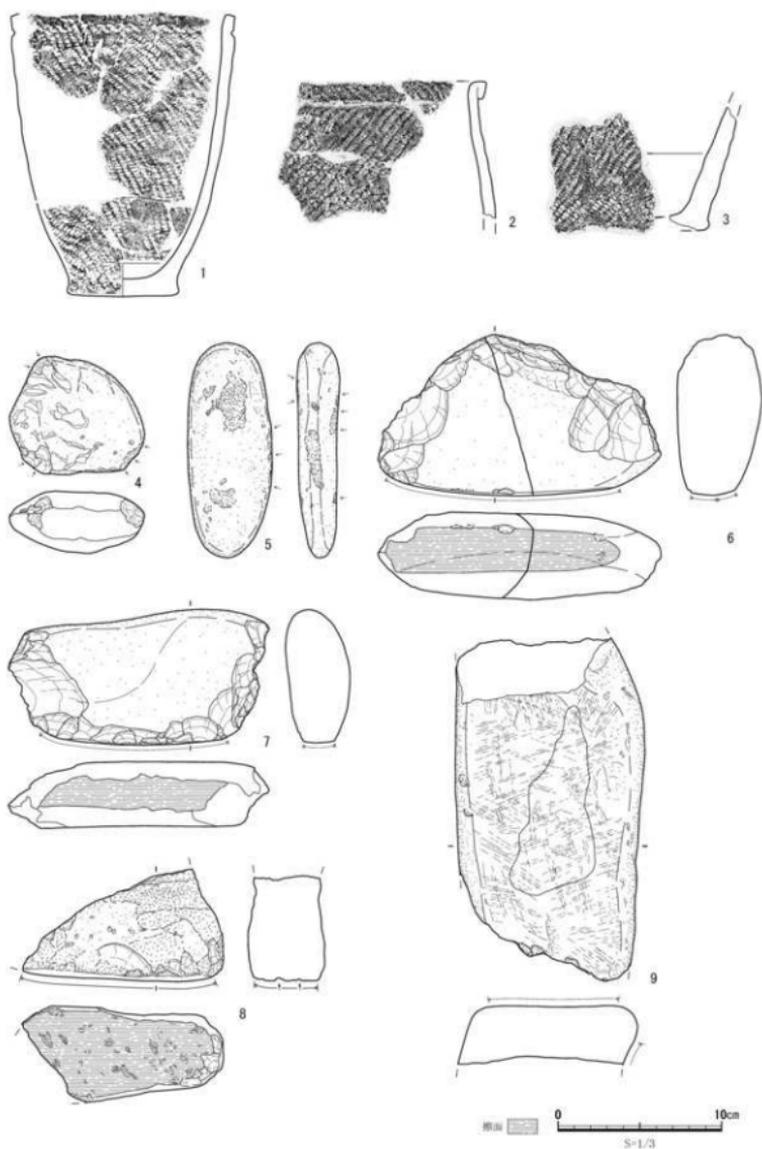
PD-7（第II-17・18図、写真図版2・11）

遺構 平成26年度発掘調査区中央から東南寄り、標高74.9m～75.1mの平坦面に位置し、南側斜面に近接する。IV層面で検出された。平面形は隅丸方形で、長軸は北西-南東方向。北西側に僅かな膨らみを見せる。壁は垂直気味に立ち上がるが、近現代の攪乱により遺構上位を削平されており、現存高の深さは10～20cm程である。覆土は自然堆積による。覆土内で広い範囲の炭化物の拡がり検出した。一部床面に接するものの、大部分は床面より3cm程上位で確認されていること、覆土の堆積の状況などを勘案して、本住居の遺棄後の窪地に炭化物が廃棄されたものと考えられる。床面はほぼ平坦で固く締まるが、炉は検出されなかった。附属するピットは、長軸上の両壁際に相対するよう各1基ずつ、北側壁上に1基、南側住居外に1基、計4基検出された。長軸上ピットはその位置・形状から、縄文時代中期後葉の竪穴住居にみられる先端ピットあるいはそれに類するものの可能性が考えられる。周溝は東南側ピットから壁に沿って北側のピットまで検出したが、それ以上は確認されなかった。

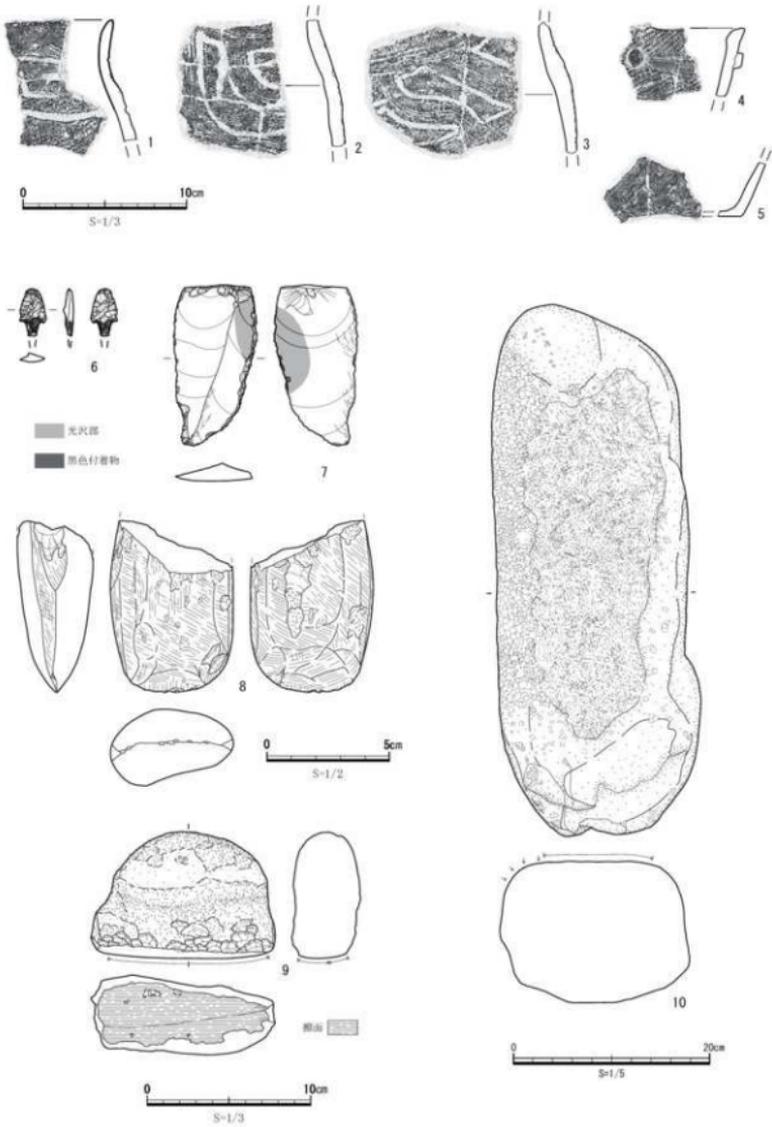
遺物 土器3点、剥片5点の総計8点が出土した。

1・2は土器。1はIII群A類、円筒上層e式の口縁部破片。2はIV群B類。いずれも床面直上出土。

時期 遺構形状より縄文時代中期中葉～後葉と考えられる。

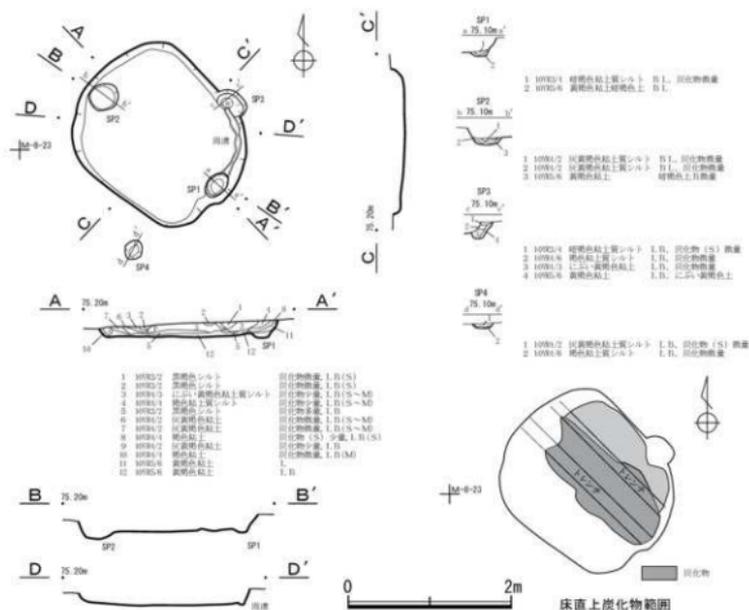


第II-15図 PD-5出土遺物



第II-16図 PD-6出土遺物

PD-7



第II-17図 PD-7平面図・土層断面図



第II-18図 PD-7出土遺物

PD-7出土遺物集計

	土器			鏡片	合計
	Ⅲ	Ⅳ	計		
覆土				5	5
床底・床	1	2	3		3
合計	1	2	3	5	8

PD-8 (第II-19~21図、写真図版2・11・12)

遺構 平成26年度発掘調査区中央からやや南西側、標高74.2m~74.4mの平坦面に位置している。北西側と南西側の壁際で、それぞれP-43、P-44と重複するが新旧は不明である。東側壁際で一部上部に攪乱を受ける。V層面で検出された。平面形は長円形で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。深さは約50cm、床面はほぼ平坦である。覆土は自然体積による。住居長軸上中央からやや北東側より方形の石圍炉(F-1)が検出されている。また、その西側には底面に小礫を伴う浅い掘り込みの地床炉(F-2)が一部重複して検出されており、旧炉跡と考えられる。附属するビットは計8基検出されているが、柱穴の配置は判然と

しない。長軸上東側壁際より皿状のビット(SP-4)が検出されており、同時期の住居にみられる先端ビットに類する付属施設と考えられる。また、そのやや西側には埋め戻された同様のビット(SP-6)が検出されている。炉の作り替え、先端ビットの検出状況から増築が行われたことが想定される。

遺物 土器499点、剥片石器16点、礫石器11点など総計701点が出土した。

1～12は土器。いずれも覆土からの出土。1・2はⅢ群B類。1は平行する縄線文を複数条巡らせた口縁部片で、大安在B式。2は頂部に縄線文を沿わせた垂下する微隆起により施文するもので、ノダブⅡ式相当。3～9はⅣ群A類1種。3～8は口縁部片。3は無文帯を挟む2条の縄線文が縦文に巡るもの。4・5は無文の折返口縁をもつもので、輪積痕が襞状に顕著に遺る。6～8は地文に縄文を施すもの。顕著な襞状貼付・折返口縁はみられないが、地文の回転方法を変える(6・8)、わずかに無文帯を作出する(7)などして口縁部文様帯をそれ以下と区別している。9は底部。10～14はⅣ群D類、堂林式。10はIO突瘤文を施す口縁部。11は無文であるが、口唇部の内傾成形など堂林式の特徴を有する個体。12は小波状口縁を持ち、摘み出しを加えるIO突瘤文を施文する個体。13・14は底部で、丸底。15～19は剥片石器。いずれも覆土からの出土。すべて珪質頁岩製のスクレイパーで縦長剥片を素材としている。15・16・17・18は一側縁、19は平行する二側縁に浅い加工により調整が施される。17は刃部尖端を一部欠損する。16・18・19は礫皮を残す。20～27は礫石器。20は、両刃の磨製石斧。基部側面と側縁に敲打痕が遺る。21・22は敲石。21は縁辺部に、22は主に両端に敲打痕が遺る。23・24は扁平礫の一側縁に擦面をもつ擦石。また、側縁には打ち欠きもみられる。25・26は使用痕のある礫。26は打ち欠きにより一側縁が弧状に整形されている。27は砥石。広い面に滑沢な使用面があり、顕著な被熱痕もみられる。20・22～24・27は覆土。21・25・26は床面から出土。石質は20がアオトラ、21・24～27は変形砂岩、22は強珪化岩、23は輝石安山岩。

時期 遺構形状等より縄文時代中期後葉と考えられる。

PD-8出土遺物集計

	土 器				イヌ バケ レ	調 製 工	・破 片 類	R F	石 核	剥 片	石 斧	擦 石	礫 石	石 瓦 類	遺 土 の 器 類	陶 器 片 ・ 片	合 計
	II	III	IV	計													
覆土		49	434	483	9	1	4	1	1	33	2	2	1	2		50	589
床底・床		1	1	2	1					4			2		2	8	19
附属片				6	6												6
砂・礫土	1		1	2												78	80
覆土		1	5	6	1												7
合計	1	51	447	499	11	1	4	1	1	37	2	2	3	2	2	136	701

PD-9 (第二-22・23図、写真図版3・9・12)

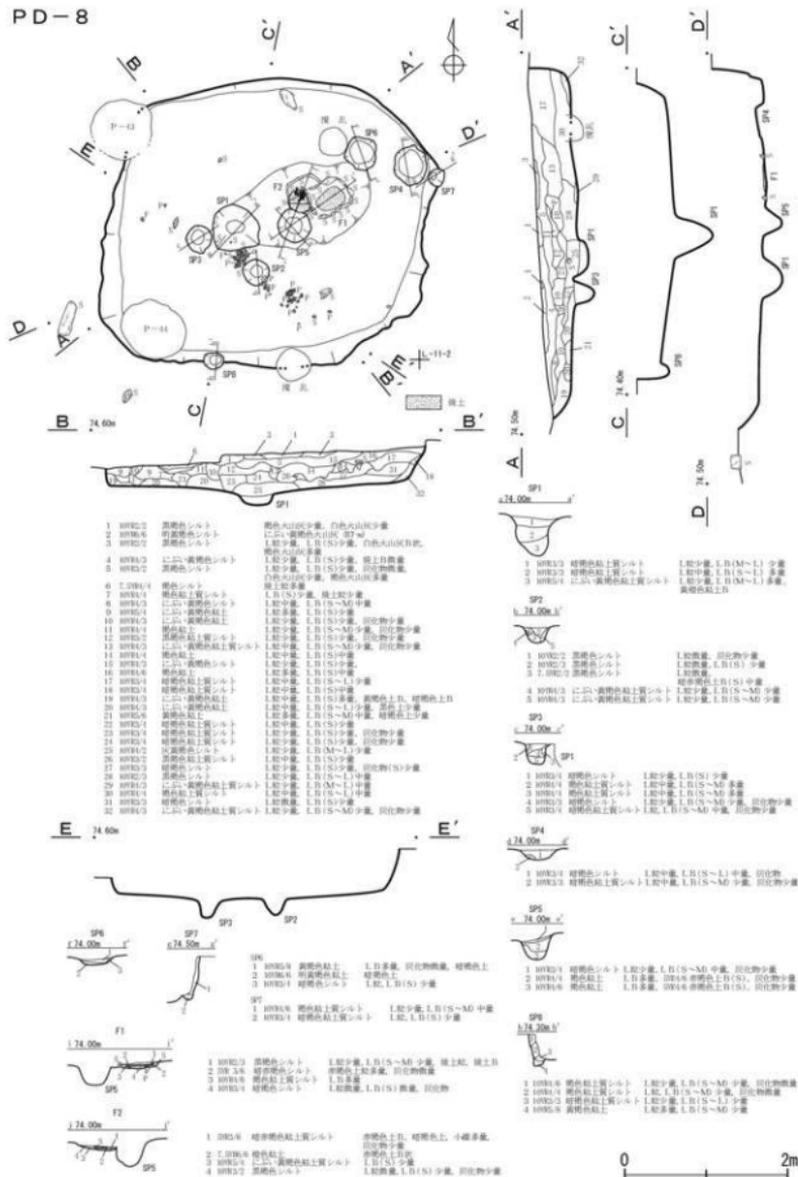
遺構 平成26年度発掘調査区中央から北西寄り、標高73.9m～74.1mの平坦面に位置する。調査区の北西側、基本土層精査中にⅣ層面から検出した。平成25年度の発掘調査時に一部検出しておりその際は土坑として記録したが、残存部の検出および精査をもって堅穴住居跡と判断した。FS-84、P-34と重複しており双方より古い。平面形は、南東側にやや膨らむ楕円形。壁は開き気味に立ち上がるが、上位を削平により喪失している。深さは現存高で25cmほど、床面はほぼ平坦で固く締まる。覆土は、自然堆積による。附属施設は、東側床面の壁際からビットが1基検出されたのみである。

遺物 土器55点、剥片2点、礫石器2点など総計63点が出土した。

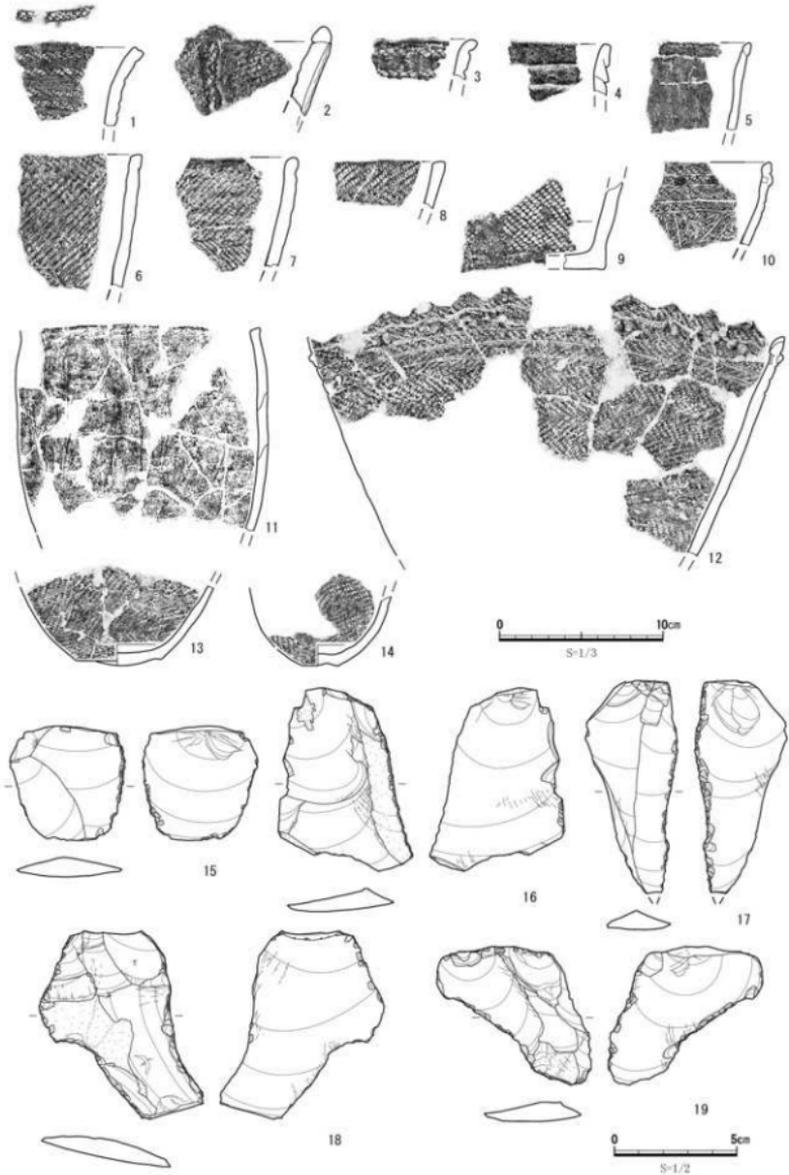
1～3は土器。いずれも覆土からの出土。1・3はⅣ群A類。1は地文縄文のみを施す口縁部。3は張り出しをもつ底部片。2はⅣ群B類。2条1組の沈線による幾何学文様など十腰内1式の前段階を想起させる文様構成をもつが、平行沈線間を刺突列で充填するなど在地的要素も伺える。4は礫石器で、凹石。石質は変形砂岩、層土は覆土。

時期 遺構形状から縄文時代中期後半と考えられるが、遺存状況が不良のため定かではない。

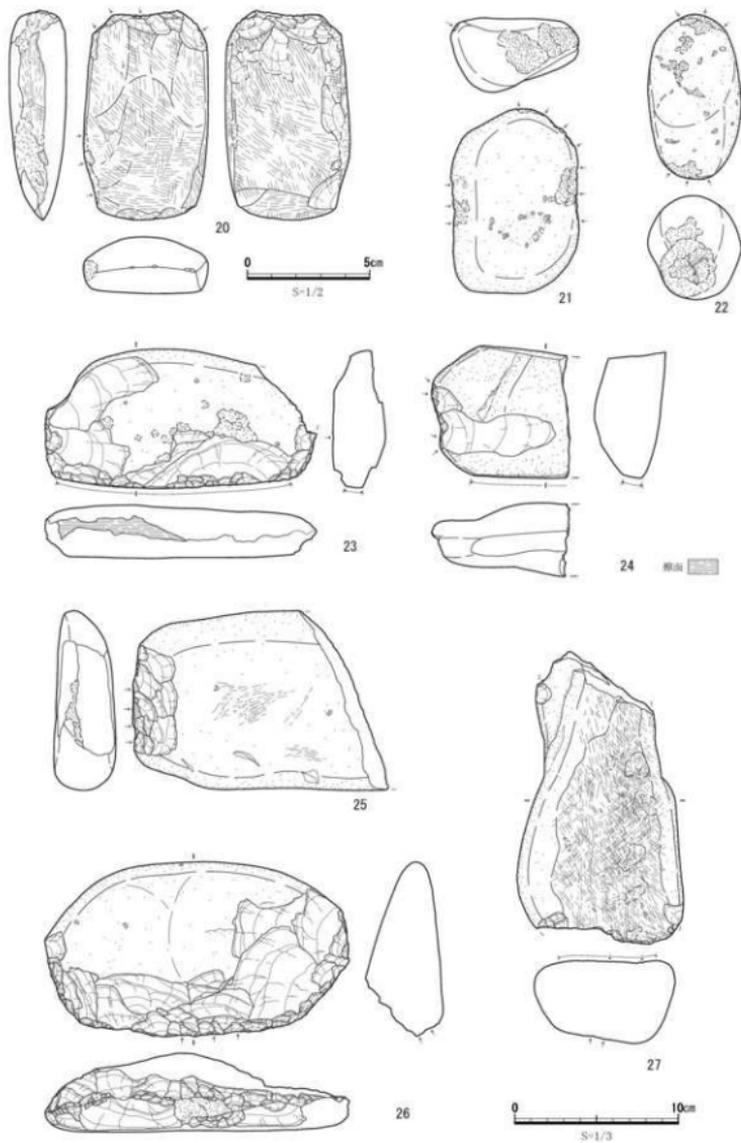
PD-8



第II-19図 PD-8平面図・土層断面図

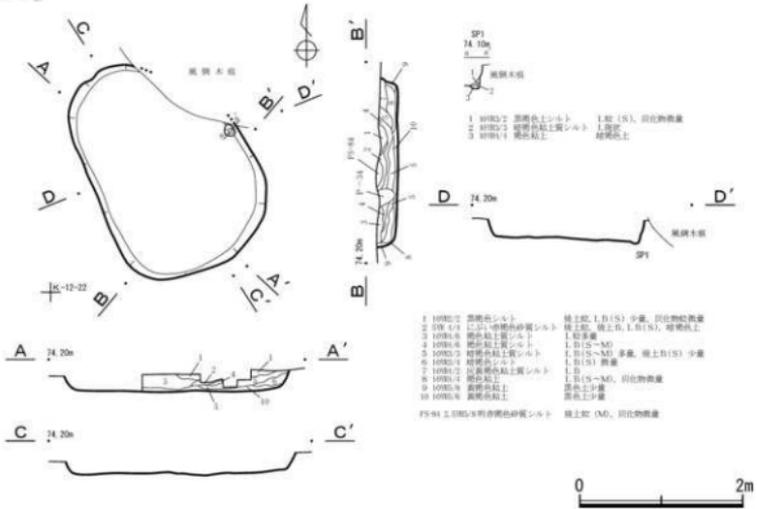


第II-20図 PD-8出土遺物(1)

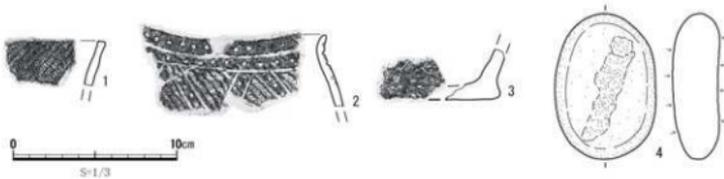


第II-21図 PD-8出土遺物(2)

PD-9



第II-22図 PD-9平面図・土層断面図



第II-23図 PD-9出土遺物

PD-9出土遺物集計

	土器				割片	凹石	瓦片	瓦器	瓦器の 品名	陶片・ 陶器	合計
	II	III	IV	計							
埋土・埋		21	14	35		1	1	1		2	40
床面					2					1	3
検出	1	7	12	20							20
合計	1	28	26	55	2	1	1	1		3	63

(2) 土坑 (P) (第II-24~31図、写真図版3・4)

本遺跡における土坑の検出数は45基である。

分布域は調査区中央、段丘尾根部および北東側支沢沿いに偏る。その多くが坑底面出土遺物等に乏しく、帰属時期は判然としない。覆土は自然堆積によるものが多く、人為的な埋戻しの形跡をもつものは稀であった。定形的なものとしては、フラスコ状土坑と、近接する茂辺地4遺跡においてみられた「寸胴鍋」様の土坑などが検出されている。個別の事実記載については割愛し、図版と一覧表を掲載することとどめ、定形的な土坑群について以下にその傾向を述べる。

フラスコ状土坑は2基検出されている (P-25・26)。

北東側支沢沿いの調査区界付近で近接して構築されており、他の遺構群とやや分布域を異とする。P-25は、開口部約1.4m・底径約1.9m・深さ約1.0mで、断面形のくびれは微弱である。P-26は、開口部約1.4m・底径約1.6m・深さ約1.0mとP-25とほぼ同規模のフラスコ状土坑で、断面形のくびれはやや強く、下位の空間が深くオーバーハングして挟り込む。その影響か、北東部に上位壁面の崩落に伴うと思われる変形が確認できる。いずれも下位に人為的埋土由来と想定されるマウント状堆積を有し、その後自然堆積由来の覆土によって埋没している。P-26底面直上堆積より縄文時代中期中葉後半、円筒上層式終末期の土器口縁部片が出土している。P-25では底面付近から帰属時期推定に足る資料は得られていないが、覆土中より同時期の土器片が出土していること、並びに遺構形状・規模等を勘案し、この2基は当該時期に構築・利用されたものであると考えられる。茂辺地4遺跡では、同様の規模形状を有するフラスコ状土坑が同時期の竪穴住居跡そばに構築されており、調査区外東側へのさらなる遺構分布を想起させるが現時点では定かではない。

「寸胴鍋」様の土坑は7基検出されている (P-11・13・16・20・23・40・43)。

開口部平面形は直径1m前後の円形を呈し、底部平面形も同様である。底面は平坦で、壁はほぼ垂直もしくは軽くオーバーハングしつつ立ち上がる。その形状から、フラスコ状土坑などと同様の貯蔵穴の形態、あるいは小型化したものであると想定される。茂辺地4遺跡においては、縄文時代後期初頭の竪穴住居跡・遺物分布域に偏って検出されており、同時期の定形的貯蔵穴との所見を持ったが、本遺跡ではPD-1・2・3など縄文時代中期後葉と目される竪穴住居にも近接して構築されている。うち1基 (P-11) については、坑底面よりほぼ完形復元が可能な中期後半・ノダップⅡ式相当の深鉢が埋納を推定させる状況で出土したほか、併せて外周を柱穴とみられる小ピット群に囲まれており、上屋構造を有していた可能性がある。貯蔵穴開口部外周を同様の小柱穴が囲む検出状況は、時期的にやや異なるが、函館市桔梗2遺跡検出の縄文中期中葉のフラスコ状土坑などに類例がみられる。

このほか、特徴的な土坑としてはP-32が挙げられる。円形の平面プランをもち、底から垂直に立ち上がり開口部が大きく開くもので、坑底面に杭孔が遺ること、土層堆積状況に壁面崩落を含む自然堆積の痕跡が認められる等を勘案すると、落し穴である可能性も考えられる。

(3) 落し穴 (TP) (第II-32図、写真図版5)

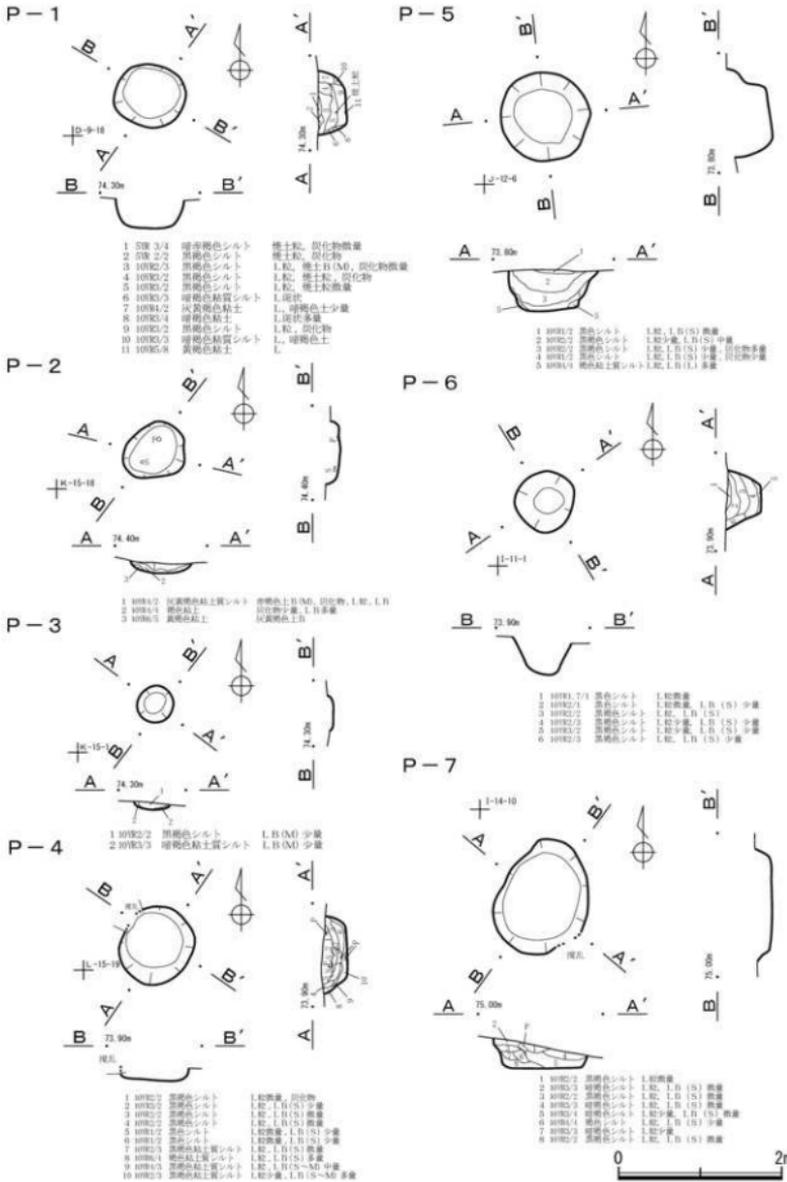
調査区中央やや西側で、東西に並ぶように2基検出している。

いずれも長軸約3m・幅約0.5mほどのスリット状の平面形を呈し、深さは0.7~1mほどである。TP-1はP-8、TP-2はP-9と重複しいずれも落し穴のほうが新しい。底面杭穴列等のみはみられなかった。坑壁からの湧水が著しく、汲みださなければ常に深さ30cmほどで水が溜る状態であった。覆土中からは縄文時代後期初頭の土器片が出土しているが、明確な構築時期については不詳である。

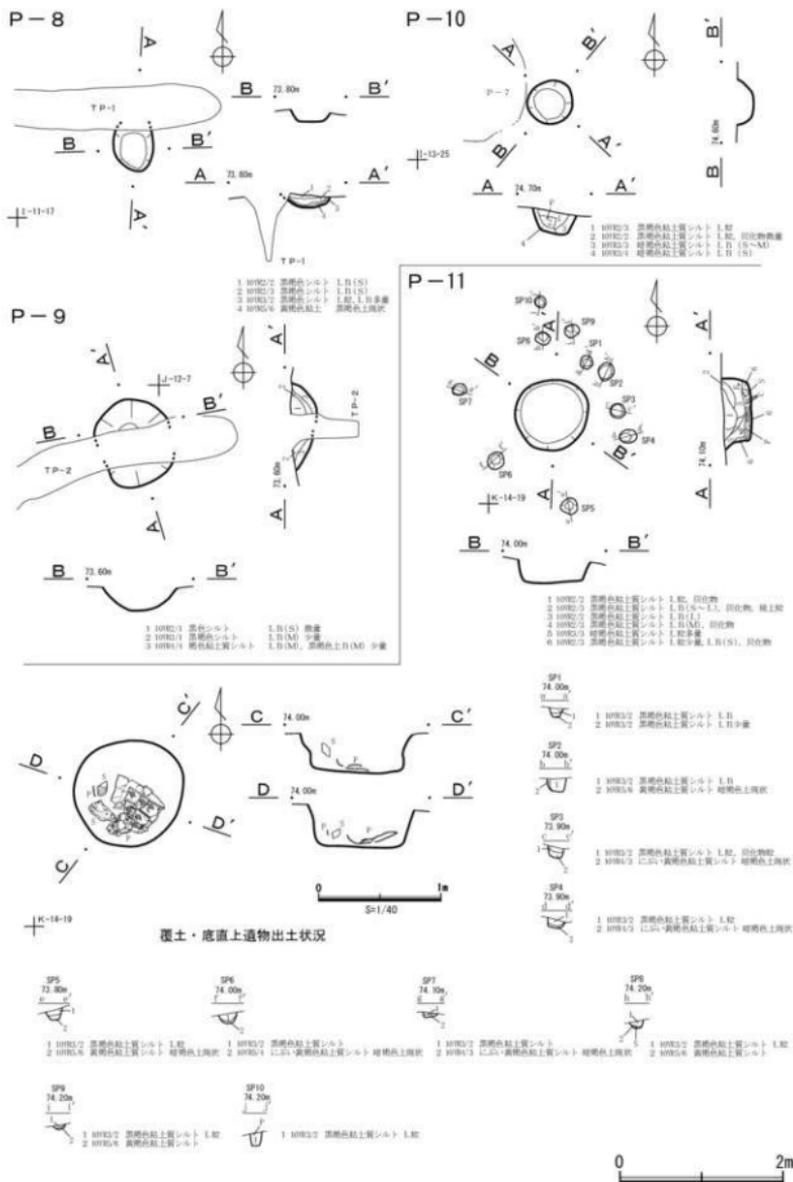
(4) 屋外炉 (FP) (第II-32・33図、写真図版5)

屋外炉は4基検出されており、いずれも石囲炉である。

FP-1はコの字状に配した石列の中に焼土が形成されていたもの。包含層 (Ⅲ層) 中で構築されており、Ⅳ層面に構築された他の遺構群より時期的に新しい可能性がある。

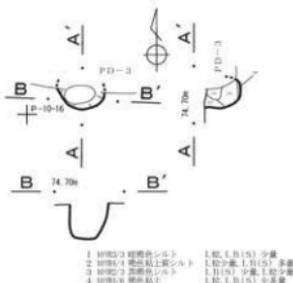


第II-24図 P-1~7平面図・土層断面図

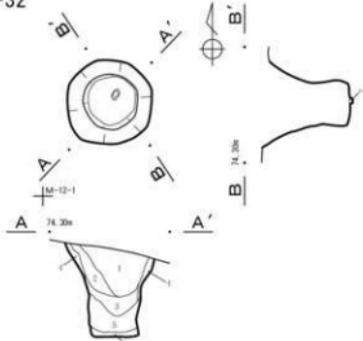


第II-25図 P-8~11 平面図・土層断面図

P-29



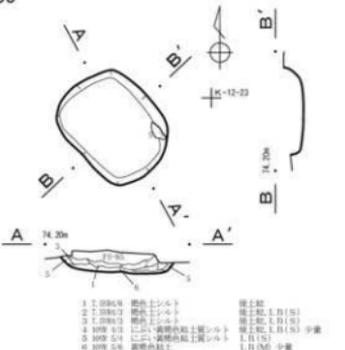
P-32



P-30



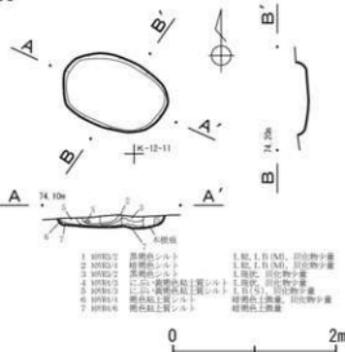
P-33



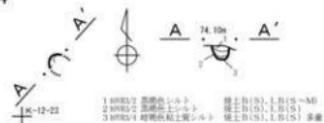
P-31



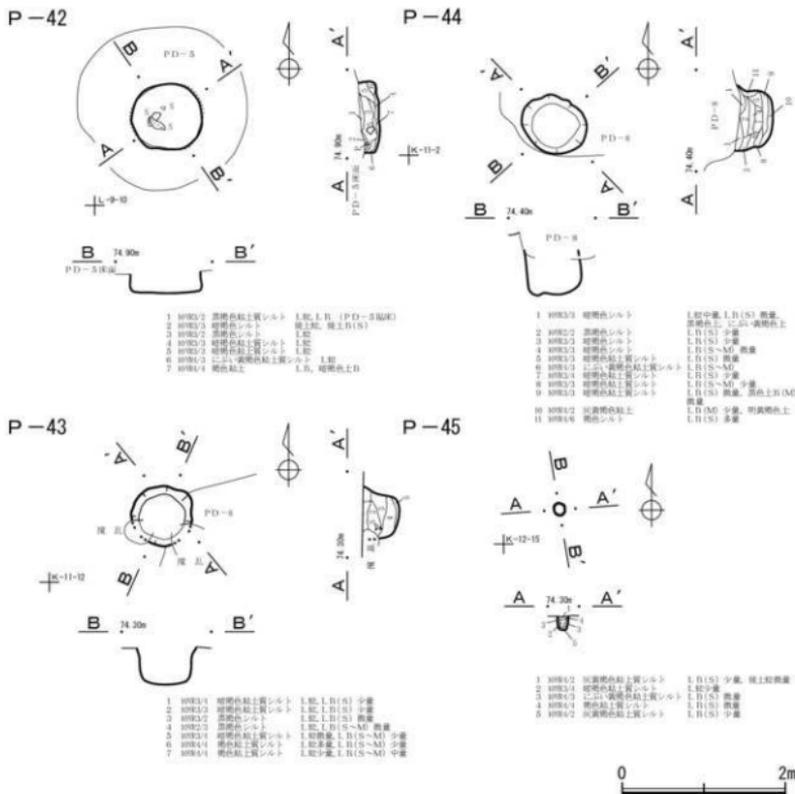
P-35



P-34



第II-29図 P-29~35 平面図・土層断面図



第II-31図 P-42~45 平面図・土層断面図

F P-2 は方形石列の中で焼土が形成されていたもので、P-40埋没後上位に堆積した包含層 (III層) 中で構築されていたもの。上面に小礫の集中がみられたが被熱等は無く、炉との関連は不詳である。

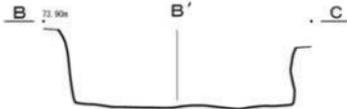
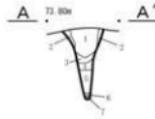
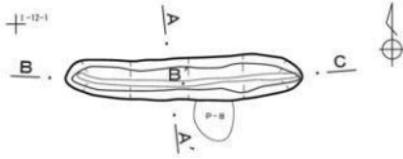
F P-3 は炉石が1点遺るのみであったが、抜け痕とみられる小穴が焼土を囲むように検出されたもの。IV層面での検出。

F P-4 は PD-8 覆土上位で検出された石囲炉。二辺の平行する石列を配し、その間に焼土層が形成されていた。PD-8埋没後の窪地を利用したものと考えられ、簡易的な竈穴住居として再利用していた可能性もあるが、明確なプラン・人為的掘り込み等の検出には至らなかった。

(5) その他の遺構 (写真図版 5・16)

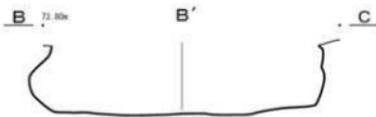
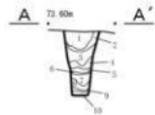
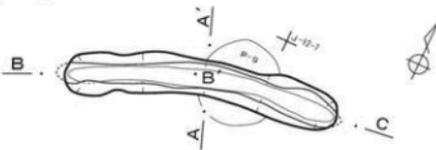
この他、焼土 (FS) が調査区全域の広範な範囲で散布的に90カ所検出されている。いずれも包含層中にブロック状に混在する形で検出されており、周辺土壌の被熱を伴わず現地性に乏しいことから、原位置をとどめていないものと考えられる。住居等他遺構での燃焼行為の後の遺棄、あるいはより高位の地形上に構築された炉址等からの流下・流入の可能性も考えられるが定かではない。

TP-1



- | | |
|---------------------|----------|
| 1 3002-1 褐色シルト | 1 白(M) |
| 2 3002-4 赤褐色土質シルト | 2 赤褐色土層 |
| 3 3002-1-1 赤褐色土層シルト | 3 赤褐色土層 |
| 4 3002-2 赤褐色土層シルト | 4 白(S)→M |
| 5 3002-1-1 赤褐色土層 | 5 赤褐色土層 |
| 6 3002-2 赤褐色土層 | 6 灰土層 |
| 7 3002-4 赤褐色土層シルト | 7 砂 |

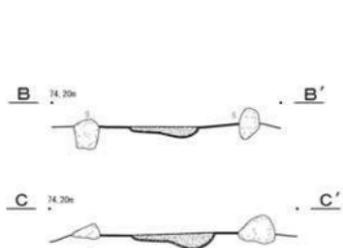
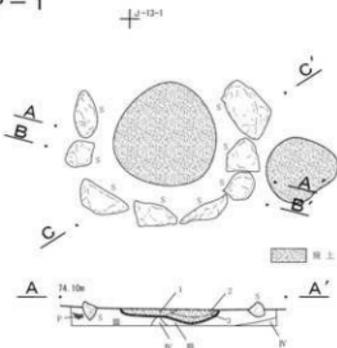
TP-2



- | | |
|-------------------|--------------|
| 1 3002-2 赤褐色シルト | 1 紅、白色物、粘土砂層 |
| 2 3002-2 赤褐色シルト | 2 紅、白 |
| 3 1.7-10 赤褐色シルト | 3 紅、白(M) |
| 4 3002-1 赤褐色土層 | 4 土 |
| 5 3002-2 赤褐色土層シルト | 5 土、褐色土層 |
| 6 3002-2 赤褐色土層 | 6 土層 |
| 7 3002-2 赤褐色土層 | 7 土層 |
| 8 3002-1 赤褐色土層 | 8 土、褐色土層 |
| 9 3002-2 赤褐色土層 | 9 褐色土層 |
| 10 3002-2 赤褐色土層 | 10 赤褐色土層 |



FP-1



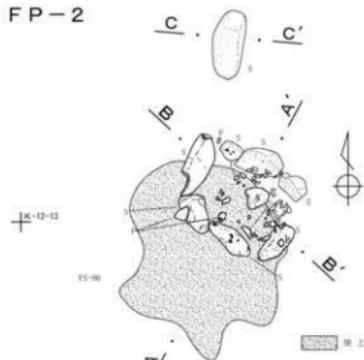
- | | |
|-----------------|------------------|
| 1 1.7-10 赤褐色シルト | 1 紅、白、中層、赤褐色土層中層 |
| 2 3002-2 赤褐色シルト | 2 赤褐色土層中層 |
| 3 3002-1 赤褐色シルト | 3 白(S)少量、赤褐色土層中層 |



第II-32図 TP-1・2, FP-1平面図・土層断面図

II 発掘調査における成果

FP-2



A 74.20m A'

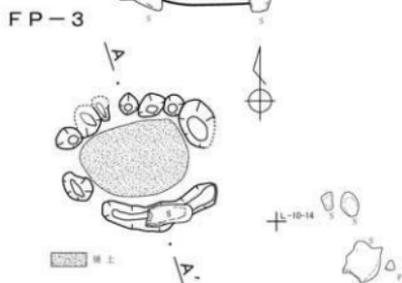


- | | | | | | | | |
|-------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 1 砂質土 | 2 砂質土 | 3 砂質土 | 4 砂質土 | 5 砂質土 | 6 砂質土 | 7 砂質土 | 8 砂質土 |
| 9 砂質土 | 10 砂質土 | 11 砂質土 | 12 砂質土 | 13 砂質土 | 14 砂質土 | 15 砂質土 | 16 砂質土 |

C 74.80m C'



FP-3

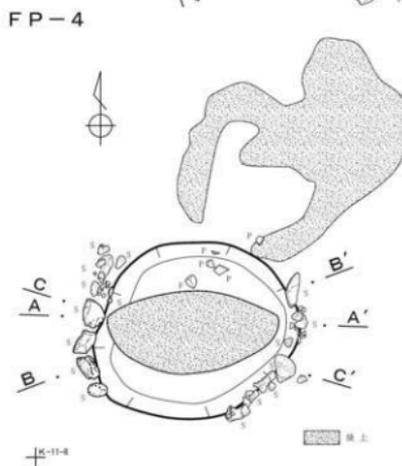


A 74.80m A'



- | | | | | | | |
|-------|-------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 1 砂質土 | 2 砂質土 | 3 砂質土 | 4 砂質土 | 5 砂質土 | 6 砂質土 | 7 砂質土 |
| 8 砂質土 | 9 砂質土 | 10 砂質土 | 11 砂質土 | 12 砂質土 | 13 砂質土 | 14 砂質土 |

FP-4



A 74.20m A'



- | | | | | | | | |
|-------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 1 砂質土 | 2 砂質土 | 3 砂質土 | 4 砂質土 | 5 砂質土 | 6 砂質土 | 7 砂質土 | 8 砂質土 |
| 9 砂質土 | 10 砂質土 | 11 砂質土 | 12 砂質土 | 13 砂質土 | 14 砂質土 | 15 砂質土 | 16 砂質土 |

B 74.20m B'



C 74.20m C'



第II-33図 FP-2~4平面図・土層断面図

(6) 遺構出土の遺物 (第Ⅱ-34~40図、写真図版12~16)

遺構出土の遺物は総数 4,822 点である。うち竪穴住居跡出土の遺物については、本節(1)項において既載のため、本項ではそれ以外の遺構出土の遺物 2,540 点から抽出して記載する。

土坑(P)出土の遺物(第Ⅱ-34~38図)

P-2(第Ⅱ-34図-1、写真図版12、遺構図:第Ⅱ-24図)

1は剥片石器で、底面直上より出土した珪質頁岩製のスクレイパー。縦長剥片の側縁に片面加工による調整が施される。近位端の一部を欠損、裏裏面には光沢をもつ部分が認められる。

P-5(第Ⅱ-34図-2、写真図版12、遺構図:第Ⅱ-24図)

2は土器。双丘状の突起と無節縄線によるキザミを加えた肥厚する口唇を有する口縁部破片で、馬蹄状縄圧痕・平行縄線列からなる文様を施す。Ⅲ群A類、円筒上層b式。覆土出土。

P-7(第Ⅱ-34図-3~5、写真図版12、遺構図:第Ⅱ-24図)

3~5は土器。3は弁状突起をもつ口縁部破片で、細めの隆帯による文様を施す。Ⅲ群A類、円筒上層d式。4は口縁端部に縄線文を1条施す口縁部片、5は底部で、いずれもⅣ群A類。全て覆土出土。

P-8(第Ⅱ-34図-6、写真図版12、遺構図:第Ⅱ-25図)

6は礫石器。広い擦面をもつ擦石で被熱痕がある。変形砂岩製、覆土から出土。

P-10(第Ⅱ-34図-7、写真図版12、遺構図:第Ⅱ-25図)

7は土器。口唇部に縄線文キザミを施す口縁部片で、Ⅲ群A類、円筒上層式後半。覆土出土。

P-11(第Ⅱ-34図-8~14、写真図版12、遺構図:第Ⅱ-25図)

8~12は土器。10を除き覆土からの出土。8はⅢ群A類1種、円筒上層b式の口縁部片。9~11はⅢ群B類。9は大安在B式の口縁部片。10は底面直上で一括して出土した大型の深鉢(出土状況については第Ⅱ-25図参照)。やや頸部でくびれる倒錐形の器形と、胴部最大径の位置と胴部下半に籐状に巡らせた、頂部に縄線文を沿わせた微隆起帯を特徴とする。11・12は短刻線列を伴う微隆起帯を特徴とするもので、11は口縁部片、12は胴部片。10~12はノダツブⅡ式段階から煉瓦台式段階への移行期に相当する資料と考えられる。13・14は礫石器。13は、広い面に敲打痕をもつ敲石。14は、小型の擦石。石質は13が変形砂岩、14は流紋岩。13は覆土から、14は附属する小ピット覆土からの出土。

P-12(第Ⅱ-34図-15、写真図版13、遺構図:第Ⅱ-26図)

15は礫石器で、顕著な凹みをもつ凹石。石質はデイサイト、覆土から出土。

P-13(第Ⅱ-35図-16~18、写真図版13、遺構図:第Ⅱ-26図)

16は土器。貼付隆帯と馬蹄状縄圧痕により施文するもので、Ⅲ群A類、円筒上層b式~c式移行期に相当するものと想定される資料。底直土出土。17・18は礫石器。17は、周縁面に敲打痕が遺る敲石。18は、狭長な擦面をもつ擦石。共に覆土からの出土。17の石質は強珪化岩、18は流紋岩。

P-15(第Ⅱ-35図-19、写真図版13、遺構図:第Ⅱ-26図)

19は土器。地文縄文の上に沈線文を施すもので、Ⅲ群A類、円筒上層e式。覆土出土。

P-16(第Ⅱ-35図-20、写真図版13、遺構図:第Ⅱ-26図)

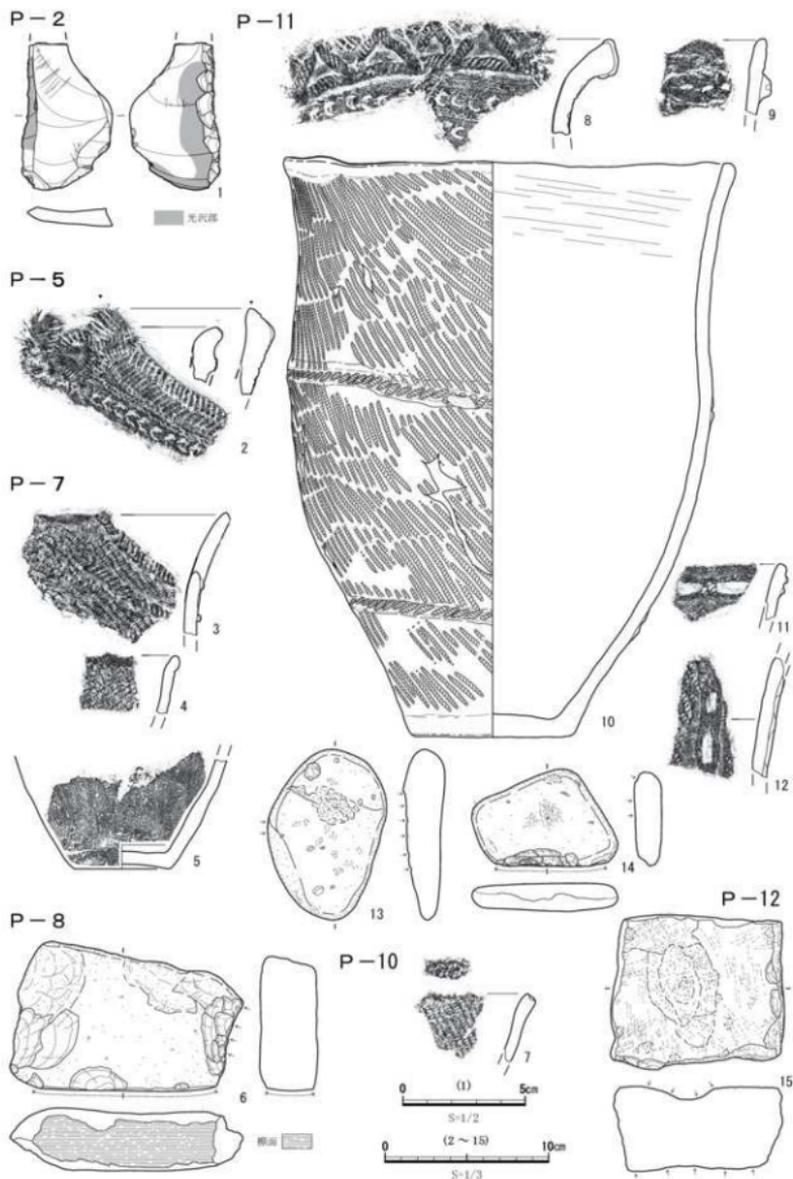
20は礫石器。広い擦面の中程に、著しく滑沢な使用範囲が認められる石皿。覆土出土で、変形砂岩製。

P-18(第Ⅱ-35図-21~24、写真図版13、遺構図:第Ⅱ-26図)

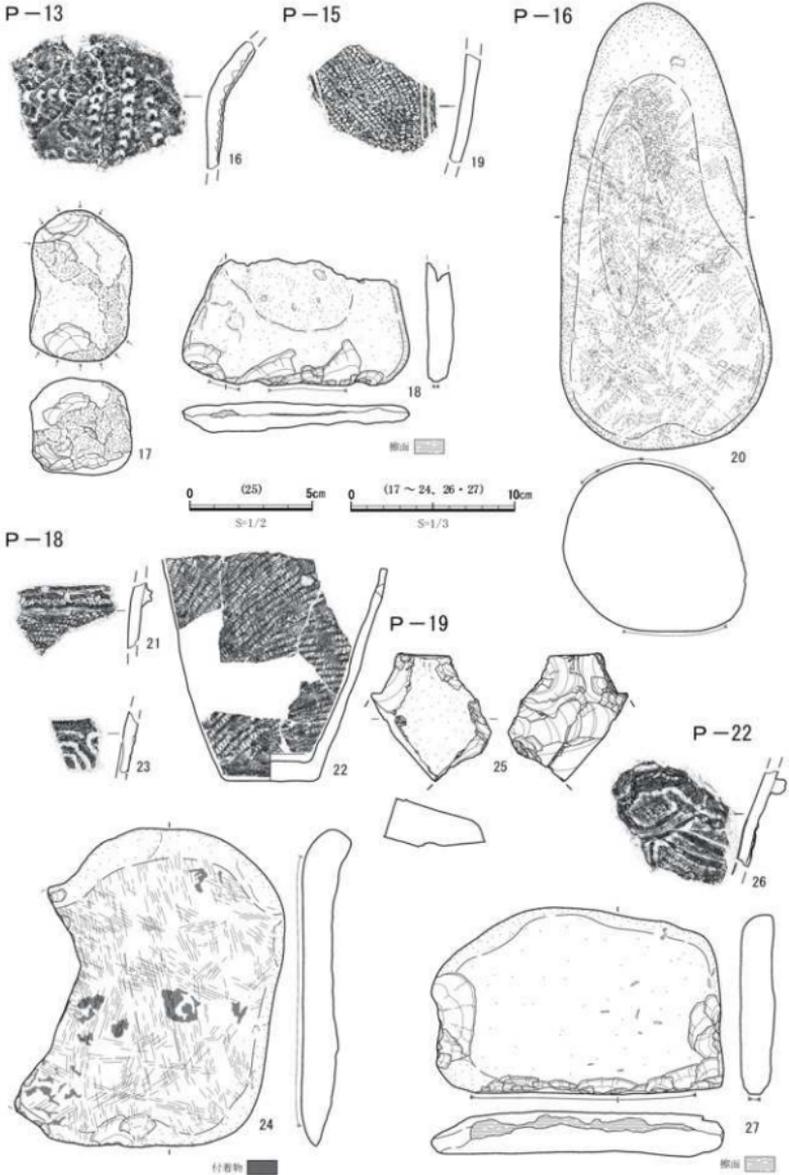
21~23は土器。いずれも覆土出土。21はⅢ群B類、LR原体の斜め回転圧による横走縄文を地文とし、頂部に縄線文が沿う隆帯文を施す大安在B式の胴部片。22はⅣ群A類の小型の鉢。23はⅣ群B類。24は礫石器で、石皿。使用面に付着物が散見され、欠損した断面にまで及ぶ。覆土出土。石質は流紋岩。

P-19(第Ⅱ-35図-25、写真図版13、遺構図:第Ⅱ-27図)

25は剥片石器で、両面調整石器。粗い加工痕が両面にみられるもので、大きく礫皮が残る。覆土出土。



第II-34図 遺構出土遺物(1)



第II-35図 遺構出土遺物(2)

P-22 (第II-35図-26・27、写真図版14、遺構図：第II-27図)

26は土器。2条1組の細めの隆帯で垂下文・弧状文を描くもの。Ⅲ群A類・円筒上層d式。覆土出土。27は礫石器で、幅のある擦面をもつ擦石。長軸両端に打ち欠きをもつ。覆土から出土。流紋岩製。

P-23 (第II-36図-28・29、写真図版14、遺構図：第II-27図)

28・29は礫石器。覆土～底面に重なって出土した3点の礫のうち2点で、29が覆土、28が底面直上出土。もう1点、底面出土の礫には使用痕は認められなかった(出土状況は第II-27図参照)。28は表裏に円形の使用痕を持つ石皿。外周の破断面(人為的な打ち欠きの可能性)や周縁に付着物がある。29も石皿で、中央に使用による滑沢な凹面をもつ。石質は28が角閃石安山岩、29は変形砂岩。

P-24 (第II-36図-30、写真図版14、遺構図：第II-27図)

30は剥片石器で、珪質頁岩製の石鏃。底面直上より出土した。凹基有茎のもので、周縁の両面加工により整形が施される。表裏両面に素材面が残る。

P-25 (第II-36図-31～38、写真図版14、遺構図：第II-28図)

31～34は土器。いずれも覆土出土のⅢ群A類、円筒上層式後半～終末期の資料。31は吸盤状突起をもつ口縁部片。32は口唇部に縄線文キザミを施す口縁部片。33は沈線文を施す胴部破片で、円筒上層e式。34は地文縄文の上に縄結節の回転押圧による綾絡文を施す底部片。35は匙形の土製品。覆土最上位からの出土で、前述の土器群とは帰属時期を別にする可能性が高い。両側縁を欠損するもほぼ完形の散蓮華様の形状を呈し、縁端部に刻線によるキザミ列を施す。胎土には海綿骨針がみられる。36は剥片石器。覆土より出土した凝灰岩製のスクレイパーで、横長剥片の遠位部に片面加工による調整が施される。37・38は礫石器。37は使用痕のある礫。長軸先端に打ち欠きがあり、表裏の広い面に擦痕が認められる。38は敲石。石質は37が変形砂岩、38は流紋岩。いずれも覆土出土。

P-26 (第II-37図-39～44、写真図版14、遺構図：第II-28図)

39～42は土器。39・42は底面直上出土、Ⅲ群A類の山形突起をもつ口縁部片。胴部には地文縄文のみ施され、突起部およびその下位にのみ細めの隆帯による装飾を施す。円筒上層式最終末期に相当する。40・41は覆土出土。40はⅢ群A類、円筒上層式後半～終末期の口縁部破片。41・42はⅣ群A類。43・44は礫石器。43は扁平打製石器。扁平な礫片の周縁を半円状に整形したもの。石質はドレライト。44は石皿。広い面に使用痕がみられる。断面は三角形を呈し、突端付近には焼け弾けたような剥離が確認される。石質は角閃石安山岩。共に覆土からの出土。

P-33 (第II-37図-45～46、写真図版15、遺構図：第II-29図)

45は剥片石器。覆土より出土した珪質頁岩製の有茎石鏃で、周縁両面を加工・整形しており、表裏両面に大きく素材面を残す。基部の先端を欠損する。46は礫石器で、石皿。滑沢な使用面が円を描くように広がる。破断面の中央に強い打痕がみられ、そこから広がるリングも観察でき、破損の原因となった衝撃がこの点に加えられた様が見て取れる。覆土から出土、変形砂岩製。

P-34 (第II-37図-47、写真図版15、遺構図：第II-29図)

47は剥片石器。底面直上より出土した珪質頁岩製のスクレイパーで、横長剥片を素材とし、打点側に粗い両面加工、遠位端には片面加工による調整が施される。表裏両面に光沢をもつ部分が認められる。

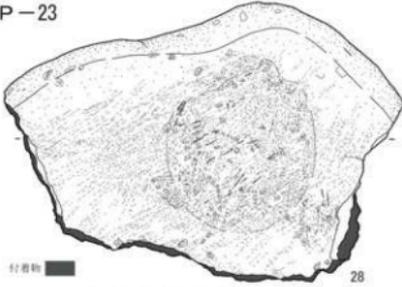
P-35 (第II-37図-48、写真図版15、遺構図：第II-29図)

48は土器。Ⅳ群A類、後期初頭の在地系土器の口縁部。覆土出土。

P-36 (第II-38図-49～51、写真図版15、遺構図：第II-30図)

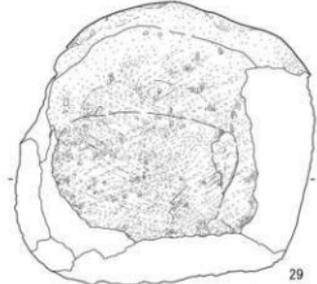
49は土器。Ⅲ群A類、縄線キザミを加える貼付隆帯と、その間を充填する刺突列・縄線文列を特徴とする円筒上層b式からc式への変遷期の胴部片。覆土出土。50・51は礫石器。50は石皿。表面は顕著な広い擦面がみられ、裏面には被熱の影響による剥離がほぼ全面に広がる。51は台石。中央に強い敲打痕がみられる。2点とも底面からの出土。石質は50は変形砂岩、51はデイサイト。

P-23

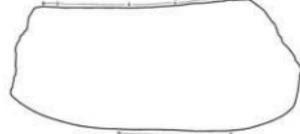
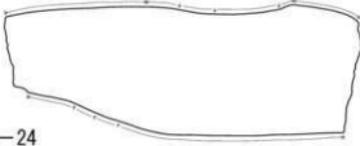


付着物

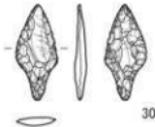
28



29

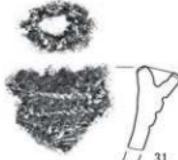


P-24



30

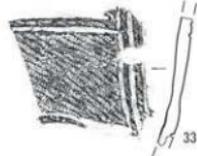
P-25



31



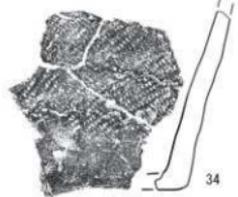
32



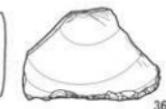
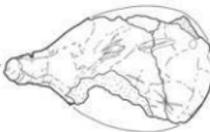
33



35



34



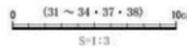
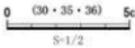
36



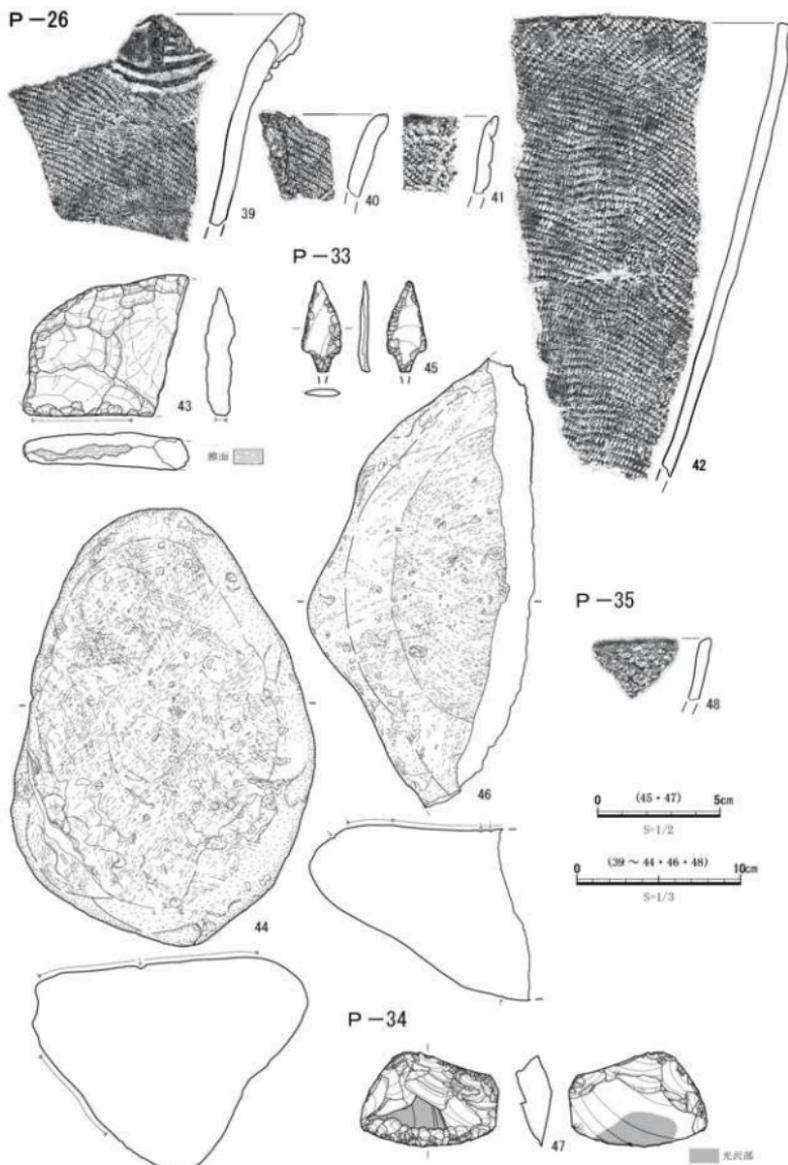
37



38



第II-36図 遺構出土遺物(3)



第II-37図 遺構出土遺物(4)

P-37 (第II-38図-52・53、写真図版15、遺構図:第II-30図)

52は土器。RL-LR 結束第一種原体による羽状縄文を施すⅢ群A類の底部片。覆土出土。53は礫石器。扁平礫の一侧縁に擦面をもつ擦石で、覆土から出土。変形砂岩製。

P-38 (第II-38図-54、写真図版15、遺構図:第II-30図)

54は土器。Ⅳ群A類の口縁部片で、覆土出土。

P-40 (第II-38図-55、写真図版15、遺構図:第II-30図)

55は礫石器。厚みのある大型礫の両面に、擦りによる凹みと、敲打痕がみられる台石。破損した石皿を再利用したものの可能性がある。底面直上出土。石質は角閃石安山岩。

P-41 (第II-38図-56、写真図版15、遺構図:第II-30図)

56は土器。Ⅱ群B類、円筒下層d式の口縁部片。覆土出土。

P-44 (第II-38図-57、写真図版15、遺構図:第II-31図)

57は敲磨器。厚みのある礫の一面に広い擦面、一端に敲打痕があるもの。覆土出土。石質は変形砂岩。

落し穴(TP)出土の遺物(第38図)**TP-1 (第II-38図-58・59、写真図版15、遺構図:第II-32図)**

58は石製品。扁平礫の周縁を打ち欠き、円形に成形したもの。59は礫石器。厚みのある礫の表裏面に弱い敲打痕がみられ、使用痕のある礫とした。石質は58が流紋岩、59は変形砂岩。共に覆土からの出土。

TP-2 (第II-38図-60~62、写真図版15、遺構図:第II-32図)

60・61は土器。いずれもⅣ群A類、後期初頭の在地系土器の口縁部片。覆土出土。62は礫石器。扁平礫の二側縁に剝離による調整と、長軸の一侧縁に擦面がみられる擦石で、覆土出土。石質は流紋岩。

屋外炉(FP)出土の遺物(第39図)**FP-1 (第II-39図-63、写真図版15、遺構図:第II-32図)**

63は礫石器。厚みのある大型礫の一端に敲打痕が集中し、広い一面には擦痕と敲打痕がみられる台石。Ⅲ層中に構築された石囲炉の炉石の一つとして使用されていたもので、石質は変形砂岩。

FP-2 (第II-39図-64、写真図版15、遺構図:第II-33図)

64は礫石器。断面がほぼ方形を呈する棒状礫の一面に、非常に滑沢な使用痕がみられる砥石。Ⅲ層中に構築された石囲炉の炉石の一つとして使用されていたもので、石質は変形砂岩。

焼土(FS)から出土した遺物(第39・40図)**FS-1 (第II-39図-65、写真図版16)**

65は剥片石器で、平基有茎の珪質頁岩製石鏃。やや厚みをもち、表裏両面に丁寧な調整加工を施す。

FS-15 (第II-39図-66、写真図版16)

66は土器で、FS-15 上面に集中して出土した土器を接合・復元したもの。籬状隆帯様の折返口縁をもつⅣ群A類・後期初頭の在地系土器群の深鉢。

FS-17 (第II-39図-67、写真図版16)

67は土器。Ⅳ群B類、後期前葉・十腰内I式前段階相当の口縁部土器片。

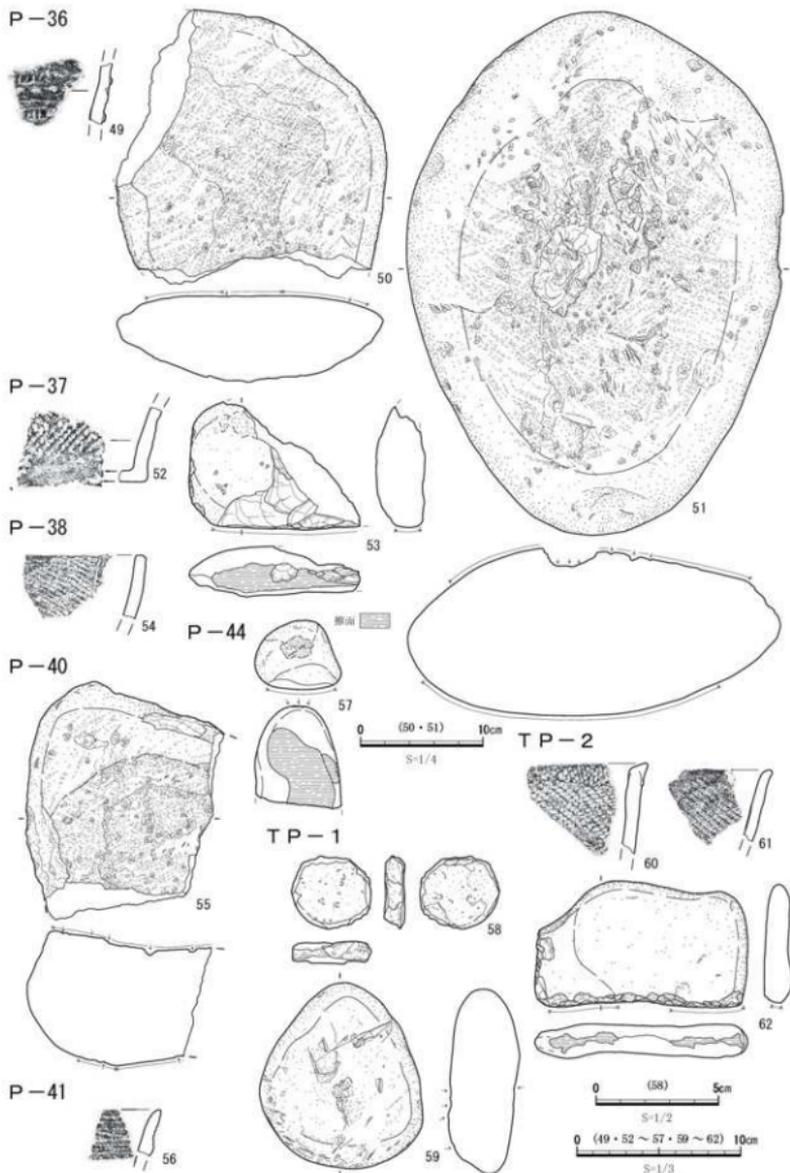
FS-21 (第II-39図-68・69、写真図版16)

68は剥片石器。強化岩製のスクレイパーで、縦長剥片の一侧縁に片面加工による調整が施される。

69は礫石器。両刃の石斧で、石質は黒色片岩。

FS-24 (第II-39図-70、写真図版16)

70は礫石器。擦痕と敲打痕のみられる台石。被熱による剝離が顕著。焼土内出土。石質はデイサイト。



第II-38図 遺構出土遺物(5)

FS-25 (第II-39図-71・72、写真図版16)

71・72は礫石器。71は扁平礫の両側縁と、広い一面の2カ所に敲打痕が遺る敲石。72は扁平打製石器の未完成品と想定されるもの。周縁を打ち欠き剥離成形している。縁辺部に敲打痕が多くみられるが、使用痕が整形によるものかは不明。共に焼土内出土、石質は変形砂岩。

FS-26 (第II-39図-73、写真図版16)

73は土器。縄線文および弁状突起頂部に縄線文を伴う貼付隆帯で装飾する口縁部片。Ⅲ群A類2種。

FS-33 (第II-40図-74~77、写真図版16)

74は土器。RL-LR 結束第一種による羽状縄文を施す底部で、Ⅲ群A類2種・円筒上層後半。75は剥片石器で、珩質頁岩製のスクレイパー。縦長剥片の平行する二側縁に片面加工による調整が施されるもので、礫皮を残す。表裏両面には光沢をもつ部分が認められる。76・77は礫石器。76は流紋岩製の北海道式石冠。77はアオトラ製の磨製石斧で、刃部を欠損する。いずれも焼土内から出土。

FS-34 (第II-40図-78、写真図版16)

78は礫石器。基端部・刃部を欠損する磨製石斧で、アオトラ製、焼土出土。

FS-58 (第II-40図-79、写真図版16)

79は剥片石器で、珩質頁岩製の石鏃。有茎のもので、表裏両面には丁寧な調整加工が施される。尖端部、基部を一部欠損する。

FS-64 (第II-40図-80、写真図版16)

80は剥片石器で、珩質頁岩製のスクレイパー。一側縁に片面加工による調整が施される。表裏両面には比熱による剥離、光沢をもつ部分が認められる。

FS-74 (第II-40図-81、写真図版16)

81は剥片石器で、珩質頁岩製のスクレイパー。一側縁に片面加工による調整が施されるもので、礫皮を残す。表裏両面には光沢をもつ部分が認められる。

FS-75 (第II-40図-82、写真図版16)

82は剥片石器で、珩質頁岩製のスクレイパー。横長剥片の一側縁に浅い片面加工による調整が施されるもので、礫皮を残す。

FS-79 (第II-40図-83、写真図版16)

83は剥片石器で、珩質頁岩製のスクレイパー。縦長剥片の一側縁に片面加工による調整が施される。

FS-81 (第II-40図-84~86、写真図版16)

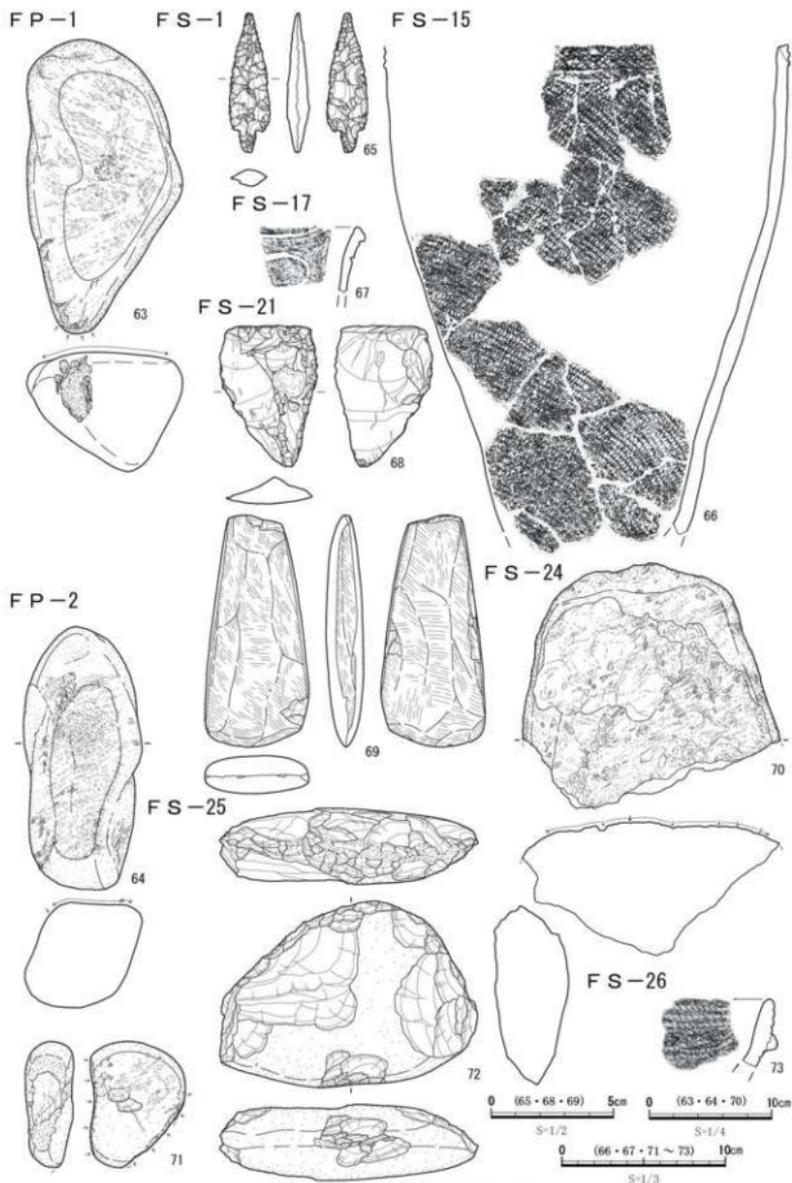
84~86は剥片石器で、すべて珩質頁岩製のスクレイパー。84は一側縁の両面、85・86は一側縁の片面に調整加工が施される。いずれも礫皮を残す。

FS-83 (第II-40図-87、写真図版16)

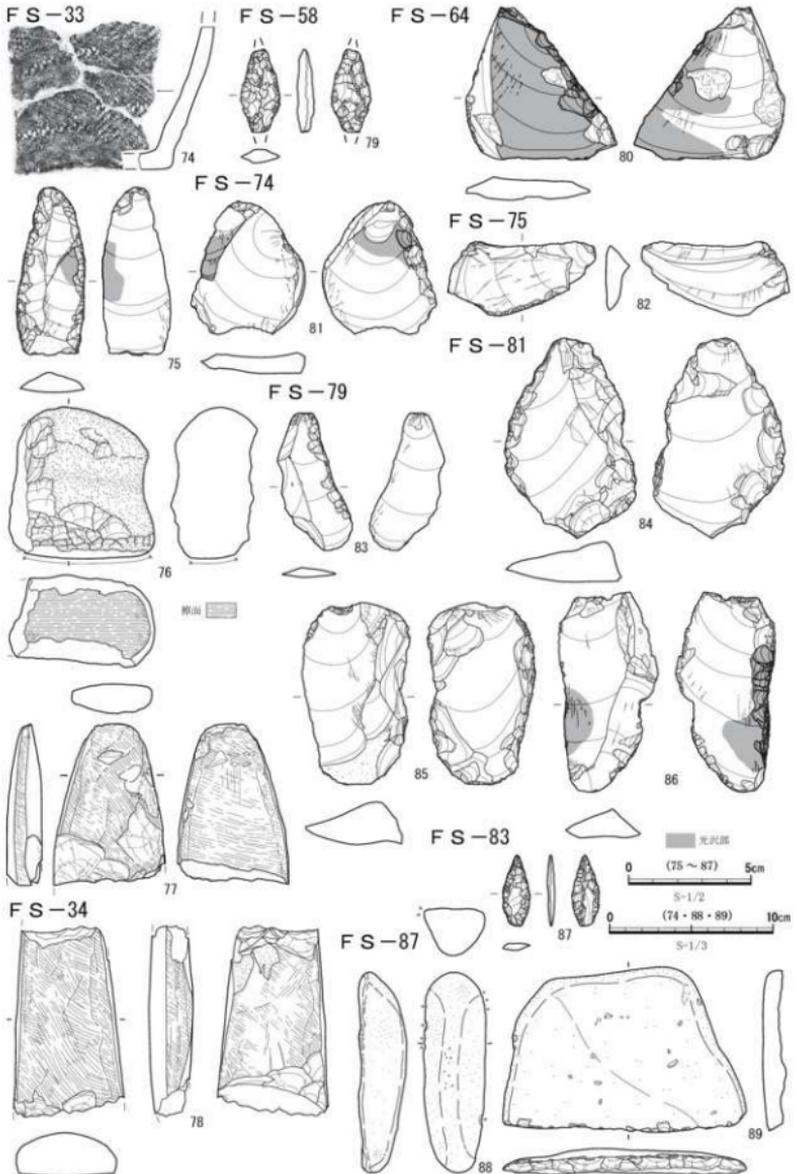
87は剥片石器。有茎の石鏃で、周縁を両面加工により整形している。表裏両面には素材面が残る。

FS-87 (第II-40図-88・89、写真図版16)

88・89は礫石器。88は使用痕のある礫で、縁辺に敲打痕が遺る。89は加工痕のある礫。扁平礫の一縁に連続した剥離がみられる。被熱痕が認められる。石質は88が変形砂岩、89は流紋岩。共に焼土内出土。



第II-39図 遺構出土遺物(6)



第II-40図 遺構出土遺物(7)